

貞丈雜記

三

73
6822
3



門 73
號 6822
卷 3

貞丈雜記卷之五

小袖之部目錄



- 一 小袖と云事
- 一 練縹之事 三ヶ条
- 一 格子之事
- 一 紅筋之事
- 一 ぬき白の事
- 一 紅梅之事
- 一 ぬき川の事
- 一 腰おろしの事 二ヶ条
- 一 小袖ぬき之事
- 一 家之定紋
- 一 織物之事

雜記三

目一



昭和41年12月20日
原安三郎

- 一 装束下の小袖
- 一 八徳の事
- 一 足袋の事
- 一 たゞの織物
- 一 ありの人はむぎ
- 一 かけもえき
- 一 あるの紬
- 一 無紋の小袖
- 一 せうふ油布
- 一 紅地白の事

- 一 胴服の事
- 一 羽織の事
- 一 御小袖と御服の事
- 一 嶋織物
- 一 加賀梅浴
- 一 遠江あのぬ
- 一 丸すの事
- 一 かしの色の事
- 一 たのぬの事
- 一 箔もやうはの事

襟をあけるの事

- 一 ニツ襟三ツ襟を着は事
- 一 大あり着
- 一 木綿の事
- 一 板の物と云事
- 一 とのあの事
- 一 むしろの事
- 一 もろばき之事
- 一 女の帯古今相遠
- 一 幸ひ乃事

まの人をさし出の事

- 一 僧綱らがの事圖
- 一 ちのえの事
- 一 唐織物と唐織
- 一 婚禮葬禮白小袖
- 一 出の人の事
- 一 蒲團の事ニケ各
- 一 合羽の事
- 一 産衣の事
- 一 振袖留袖の事

- 一 下をカマ下み帯
- 一 肌乃帯
- 一 犢鼻禪之車
- 一 手綱乃車
- 一 あゝろり染
- 一 白衣之車
- 一 頭巾之車
- 一 白めじりの車
- 一 紋縫目付
- 一 目結の車
- 一 ぬんぞろの車
- 一 女のたふさぎの車
- 一 今木之車
- 一 取染之車
- 一 かはきり車
- 一 染付小袖の車
- 一 あめてろ頭巾
- 一 袷目花色小袖
- 一 段金と云車
- 一 村濃之車

- 一 中々濃の車
- 一 よめ君衣装之車 圖
- 一 筒袖之車
- 一 みどり色乃車
- 一 りす紫の車
- 一 ちりぞ色
- 一 真紅
- 一 いろこ形
- 一 腰巻之車
- 一 衾之車
- 一 額縁乃車
- 一 襦袢之車
- 一 滋目結之車
- 一 うれあゐの車
- 一 あけと云車
- 一 薄墨色
- 一 うちわけ乃車
- 一 小袖一重と云車
- 一 寶盡一
- 一 かつきの圖

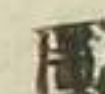

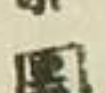
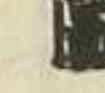



- 一 腰卷之圖
- 一 天子御紋之事
- 一 打ち色袴
- 一 紙衣之事
- 一 家の紋と云事
- 一 かしぎ色の事
- 一 鳴きり乃事
- 一 巻染之事
- 一 きむらぎと云事
- 一 小児綿入不着事
- 一 うちおき物
- 一 十九乃布
- 一 花の事 圖
- 一 袷大袷小袷衣袴 ウキキオキキヌ
- 一 あさぎ色二品ある事
- 一 鳴り衣之事
- 一 帷子のつまかきと云
- 一 白と云色
- 一 奥布
- 一 上古結四品有事

- 一 袖をその事
- 一 巾を帯之事
- 一 時服之事
- 一 望陀布
- 一 六丈細布
- 一 綿入衣服
- 一 赤鳥乃事 圖
- 一 摺の小袖
- 一 ころけ色
- 一 大身かひり之事
- 一 素服乃事
- 一 宿衣之事
- 一 八丈絹
- 一 帖絹巻絹
- 一 袖あし事
- 一 染色の事
- 一 小袖を丸物と云
- 一 無紋之小袖
- 一 加うき筋
- 一 紺と云

- 一 升頭巾
- 一 両くられおお筋
- 一 かいきりくと云事
- 一 ぬき白の事
- 一 目結鹿子
- 一 附帯之事
- 一 重陽小袖之事
- 一 紫裏之事
- 一 けのひの帷子
- 一 みと山
- 一 地赤地黒地白
- 一 すねとんの事
- 一 段乃物
- 一 朽葉色檜皮色
- 一 茶屋染之事
- 一 たすき乃事
- 一 不けの小袖之事

烏帽子之部

- 一 古の烏帽子之事
- 一 縁塗乃事
- 一 風折糸ほ
- 一 平禮
- 一 梨子打
- 一 柳さび
- 一 上古の折烏帽子
- 一 小やひの事
- 一 さぶの事
- 一 立糸ほ
- 一 糸ほの眉事
- 一 軍陣もみ糸ほ
- 一 引立
- 一 横さび
- 一 今乃折糸ほ
- 一 てうほけ之事

- 小巾ひの仕様 
- 小巾をうづつうづの車
- 紫皮のあほりうけ
- てうつうけうま様 
- 長小結の車 ニヶ条 
- 折烏帽子の時の装束之車
- ひらね寶色
- 細あほり 
- 横さし折あほり 
- あほり針
- あほりの筒力車
- てうづ掛とえほ掛と云車 
- 赤革の烏帽子うけ
- 組ゆひる烏帽子うけ
- 打うけあほり
- 澁ぬりあほり
- 公方様御烏帽子
- 軍陣烏帽子 
- 引入あほり之車
- ふくろの烏帽子

- 長あほり
- 立あほり名所
- 烏帽子あほりの車
- 立烏帽子恰好
- 長小結黒替と云車
- あほりぬり様の車

以上

貞丈雜記卷之三

伊勢貞友 同

千賀春城

同

門人

岡田光大

校

小袖類之部

一 小袖と云事上古ハ装束の下ニ着テ衣服（ハナキ）を（シ）掛（ケ）トク袖（ノ）を大（キ）シ（テ）云々袖（ノ）として（シ）弟（ト）ト云々也（ト）ヲ（シ）掛（ケ）ト云々也袖（ノ）の大（キ）多（ク）ト對（シ）ト常（ニ）此（ノ）衣服（ヲ）ハ小袖（ト）ト云々有（ル）ト云々也（ト）学物（ニ）有（ル）ト云々也（ト）袖（ノ）を（シ）掛（ケ）ト云々也（ト）袖（ノ）下（ニ）有（ル）ト云々也（ト）小袖（ト）有（ル）ト云々也（ト）入（ル）ト云々也（ト）ト云々也（ト）小袖（ト）ト云々也（ト）

あり也

一 福至ぬきと云ハ福の名あり福の云々糸を生糸しと
ぬきをハぬり糸より織りたる物也福りぬきと云也ハ
れハ文字ハ練緯チリヌキ書くもそのあまじも昔より練緯チリヌキ
とも書来れり昔ハ文字ハ吟味もあく書き用ひる
多しはては福りぬきハあまじの福りぬきのハめハ練
至ぬきと云二の品ありあまじのぬりぬきを今ハあ
らハ一色と云のハぬり福りぬきを今ハのハぬと
をうり云也ハあまじをハ一色のハぬと云た
を今あまじのハぬと云とあくあやまり也

尺素柱来ニ練緯
ト下

一 あまじハ福りぬきハ昔ハ男も女も着る物也のハぬ
ぬりぬきハ男の着る物也あまじ御成河牙古実云
ハ一色ハ事男服の事よりくる人の自然ハ一色ハ
ぬり女房服之ハ年々ハハハありハ五月五日の午時
まがぬハ一色の後ハぬりぬきハ一色ハ

貞丈云今ハ將軍家よりハ御定より侍従の上ハあ
らを用をせりハ一色のハぬりぬきハ一色ハ
其時代ハの御定よりハ事ハぬりぬきハ一色ハ
一福りぬきハぬりぬきハ一色ハ一色ハ一色ハ
ぬき白あまじのぬりぬきハ一色ハ一色ハ

總覽ニ格子ヲ織
 タルヲ唐小袖ト
 云歟鎌倉年中行
 事云以餘費唐
 小袖公方極川女
 房格可被召云々

一 卍字筋と云横の筋をふと織ぐるを云也今の所
 多し腰の而は筋を織るおり筋を腰の而は織るおり
 當る也ゆかりの織物ハ惣体織るす筋を織り也
 一 〴〵〵〵〵〵ハ格子と書テ其盤の目此〴〵〵〵〵〵多し横
 筋を織る也是ハ古ハ位高き人おるハ馬〴〵〵〵〵〵
 糸ハ團書云女中息もか〴〵〵〵の織物うちまうせてハ
 〴〵〵〵〵〵ハ紅格子也鎌倉年中行事ハ紅格子とあり地
 〴〵〵〵〵〵ハ織る也是ハ高位の女房ハ織る
 〴〵〵〵〵〵也御成次書古実〴〵〵〵〵〵ハ女房息

〴〵〵〵〵〵中筋ハ〴〵〵〵〵〵すハ〴〵〵〵〵〵〴〵〵〵〵〵
 飾と書テ一〴〵〵〵
 構る物と云〴〵〵
 自於中筋ハ〴〵〵〵〵〵上意ハお叶ハ方ハ〴〵〵〵〵〵

地紅ニテ筋ノ色
 ハ何色ニモスル也

一 〴〵〵〵〵〵又す〴〵〵〵〵〵ハ筋す〴〵〵〵〵〵も云筋を細く
 〴〵〵〵〵〵織る〴〵〵〵〵〵〴〵〵〵〵〵中筋ハ〴〵〵〵〵〵
 織物うちまうせてハ〴〵〵〵〵〵ハ筋す〴〵〵〵〵〵織
 御供古実〴〵〵〵〵〵ハ筋す〴〵〵〵〵〵織
 物ハ中筋も〴〵〵〵〵〵
 一 紅梅と云ハ〴〵〵〵〵〵見上代ニ紅梅ト云ハモ、イロ、ユキヲ云ニ品キリ
 〴〵〵〵〵〵ハ紫帯系ハ紅ハ織る〴〵〵〵〵〵也筋ハ
 一 ぬき白と云ハ〴〵〵〵〵〵ハ白ハ織る〴〵〵〵〵〵也筋ハ

蘇中旧記云紅梅
又キシロハマ
デメシム

一 くれ赤筋と云ハ地色ハ何れも紅の横筋を織る是
佛供古実云紅筋の事男八十回五歳までしてハ是
も織筋の内也

貞順女房衣裝次
又云ひしつらつを
とハこきづまの
筋と云うすきべ
のすぢとをツ
キヤク染ナム

一 ひまつまぜともあまうと云ハ川おせとも云ハ紅梅の筋
とぬき白の筋と一ツまぜ紅梅とぬき白と五方うめくる織る云佛供古実云云か
きる汁可存若用ハ女房衣裝年あけても用云
右うらうらより心下皆禊りぬき此織極也是織物と
云也佛成次古実云男流此織物男ハ人ずるのみ
おし〜ハ但下ハ〜も思ハ也云織筋と云ハ織物の部
まハ入らざる也蜷川記云おりすぢをハ老くつらうきよ

と〜手似合ハやうハおせ〜の思ハ云

一 今腰うらり腰あきあど〜の〜の腰ハ汁筋を付
はハ右の織筋を腰より織る也古ハ〜替り腰
あきあど〜云事知〜熱体ハ筋を織り〜あり

一 今世婚禮の時腰うらり腰あきあど〜云名乃輿カッ
より輿あきと云ふ似〜の〜無地の〜めと云物
を志す〜無地の〜めと云物筋を織らぬ禊りぬき
也昔ハ腰替り腰あき無地の〜めあど〜云事ハるん
あり〜也末の世は〜の事を知りおて法式
乃めくある也

一 小袖ぬきと云ふ古ハ殿中も私もあつ是ハ猿樂サルガクノ
能をさせしむ酒宴あつば小袖をぬきて猿樂よそ
にす白事也

一家の定紋テウモンといふ物ハ本ハ旗幕ハタカあつと付る志シ也素
襖アツヒタタレ垂小袖あつとハ家此紋付ノ事もあり外ノ紋付
事もあり委々装束ノ都々記す又条々シヨウ装束云々シヨウ立振
胸服ムネヅケとハ織物オリモノ色イロ不定フシギ白きあや又ハあなほアノホむきを地を
色イロとよ深々フカク胸紋ムネノイロむきとあつと付ツケ也

一 舊記キウキ又織物オリモノと云ハ紋イロを織オリる也練費ネンヒもろろしあど
を織オリるハ織物オリモノと云ハ事ハ前々記す又ろ織物オリモノと云ハ

古代白小袖ト云
ハ平絹也

唐カラより渡りくる織物也ろ物とあつと事也

一 装束の下シタは男オトコノ小袖ノ事条々シヨウ装束云々大々オホオホびびビビの時
必カナラシ白シロき小袖コタテマテを男オトコへ給タマフる也一 唐成カラナリハ古コ代ダイノ時
ら打ウチ掛ケ物モノ也一 又云云イハレ也一 唐カラノ下
は男オトコノ小袖コタテマテハ初ハジメにすぢも不フ苦ク也初ハジメにすぢも不フ苦ク也条々シヨウ装
束ソウゾクノ下シタハ男オトコノ時トキ無ム紋イロノ小袖コタテマテ也一 唐カラノ時トキノ
用ヨウ害ガイ記キ云イハレ給タマフハ初ハジメにすぢも不フ苦ク也一 又男オトコノ装束ソウゾクノ下
は男オトコノ小袖コタテマテ也一 唐カラノ時トキノ用ヨウ害ガイ記キ云イハレ給タマフハ初ハジメにすぢも不フ苦ク也

一 胸服ムネヅケと云ハ今ノ羽儀ウデガタノ事也胸ムネノ事コトハ今ノ羽儀ウデガタノ事也
の類ルイ也胸服ムネヅケと云ハ道服ミチヅケと云ハ書シけケもモななれれハあな

舊記ニ胸服ノ
一見エタリ又ハ
羽儀ノ事アリ

永享六年二月廿七日又七夜御祝山名右内門督入道常服道服ニテ参勤御産所日記ニ見コレハ道服也

つるぎぬのつらね

あり也道服と云物ハ別也道服ハ腰より下まであり
つるぎぬのつらね似る物也公家大納言以上の人同くして
せしむ物也

八徳と云物あり嵯峨川記よか衣の上までつるぎぬと云
つるぎぬあど打うけ貴人の比前々事いづる是
ハ也とあり八徳と云胸服の事あり

つるぎぬハ徳と云名を付する成也

ぬと云革羽織の事あり

一羽織と云ハハ鳥の羽より織る所の名也

此あきたかゆがじ名の羽より織る衣服の事日記

つるぎぬハ袖あり

つるぎぬと云ハ放の字也

帯せすちあきぬと云也

事ハあきと書くあり

つるぎぬと字を付するあり

古ハ胸服と云一也

一足袋の事

ハ御免の時ハ必上の比足袋一足

比免の比はあきぬの内

考故の皮あきぬ皮あり不可用但陣の時ハあきぬ

つるぎぬのつらね
つるぎぬのつらね
つるぎぬのつらね
つるぎぬのつらね
つるぎぬのつらね
つるぎぬのつらね
つるぎぬのつらね
つるぎぬのつらね
つるぎぬのつらね
つるぎぬのつらね

于能也足袋ノ如クニテ括くわハ物也
ハハカナル也
室町記云新制永
年七華機年齒五
旬以後可被免許
但雖未及此於
為病跡者蒙免
可用白草履華矣
ト見タリ又足袋
ニ據據付レモ有
ト見エテ御座所
日記ニ覽正七年
十二月廿二日所
所極ヨリ申足袋
ヲ被下文ツタ敷
批ニ也ト見エタ
リ故トハモヤウ
ノ幸也
切御京都松尾院
一併御申由國ノ
通儀敷タリ其
儀ニ小故ノ足袋
レト見エタ

皮の足袋武雜記考
支書半同卷十月朔日よりをき聖華の二
月廿日あり但三月のちをき事不苦い
貞丈云古ハ華足袋也今の本綿足袋古ハあハ九十
年計も似る是ハ女も紫華の足袋をき成時
き由古老ハ物語けり也
一 脚小袖ハ袖ハぬき此事也又脚服ハ常ハ小袖ハの事也
二 糸ハ皮書ハあり小袖ハ脚服ハハ別あり知
一 旧記ハたゞ此織物ハあり練愛ハの事也
一の類をき袖ハぬきハの事也又足唐の織物ハ對
きハ織物ハ云用害記ハ云ハの物ハの事也



一 五南都法隆
寺使ナリ着ス
長巻トテ黄色
トテ用ヒ
下ナリハ
不審ニテ法

一 鳴り物ハ旧記ハあり諸方の鳴ハり織生ハ物あり
今ハ八丈ハ鳴ハり織出ハ也筋ハを織ハる物也
貞丈云今織物の筋ハあるを鳴ハと云ハ鳴ハり織出ハ物
筋ハを織ハるハ鳴ハと云ある也今ハハ筋ハのハを鳴ハと云
也
一 赤川ハ人法ハむきハ物旧記ハあり此ハ絹ハも存ハ又存
者ハんハも存ハ此ハの方ハ外國ハより出ハる物ハ也
一 脚成次
切古実ハ云ハ人ハの小袖ハのハ類ハ別ハる物ハ也

梅染赤梅黒梅
白梅
赤梅
黒梅
白梅
赤梅
黒梅

百あけんもめいひきくく物と八唐より渡り物
を云也条々聞書云布川久人袖ツキの小袖紋の付くるハ不
昔云云

梅染赤梅黒梅
白梅
赤梅
黒梅
白梅
赤梅
黒梅

鎌倉年中行交ニ
云小袖ハ是ル
事十ノ市遊表也
其以下ハ皆力ナ
爾黄也云

一加賀梅をぬると云ハ加賀國より出ル梅染の絹也梅染ハ
梅や赤梅と云物あり染也赤き色ハ黄キいある色也
うげもえきと云染色旧記あり今と云赤色ありと云
類ありと云宗五一冊校書うげもえきと云ハ人
小袖ありとありもえきと云ハいさく色イサクの類

あり

一遠江ありと云事旧記あり遠江より出るあり梅染の
絹也色あかアカ一番と云草紙根あり染也

一あゐ糸袖アヱと云物ハ推名と云より出る袖也推名ハ河内ハ
子あり

一丸アと云表裏ともすス一袖小袖を云給あり

一無紋の小袖と旧記あるハ今と云此の小袖と云同
家の紋をも小紋ありと云染すきとの染地を云

一からん色と云黒き色を云古異國よりカフ褐布と云物
渡りたりと云色馬と云色あり一黒色を云ち色共
る染色と云云褐カフの字を云河と云ちと云ちと云ちと云

彌ノ地ハ本低市
色ニモ云云又
下ヨリ

勝負の勝と云事よ、其ありて昔ハ軍陣ハ專試色を
申ひたり也うち色と云は俗より人色と云也

或説ハ古播磨國飭磨の里より藍を染く保ちうち色
や〜る漆物を出〜る古歌よ

又夫木抄ニ中巻
そのみこの歌は
あはれあるのついで
めいれつらうら
ぬか〜色あり
の〜人そ〜ひつ
又古歌ニ
よめをあすあり
よめをあすあり
つらぬま〜い
きし〜こ〜ま

我あふありぬのうらにありてはあはれをめで〜る
あ〜るせよめを〜る婚禮ハ必り人色を
用〜ると云〜り旧記ハ軍陣ハ用〜るハ人色〜るは婚
れハ用〜ると云事ハ人色〜るは婚れハ用は
おねあ〜るはあはれハ用〜る事也さすどもは色限

て必用〜と云法ハ〜
せうぬあ〜るぬの〜る物条〜る書〜る照布油布二

天文十一年
七月十三日
照布一端
油布一端

各一の布の名也惠林院殿以代永正六年十二月廿四日宗護
崎也〜る御内書の紫文ハ就字儀太刀一腰持
子ニ端照布三端油布二端烏目三千延列赤ハ記帳
其外也〜る照布ハ油布ハ〜るあり布ハ詳ありす
一た〜るぬの〜る条〜る書〜るあり御成次方古実〜るぬの〜
あり同〜物也唐布也唐より渡〜る布也
こ〜ちあるの〜るハ紅地白也地白の〜る

うち〜るあり
唐中田記云七月
一日ありあり
あ〜るありあり
た〜るありあり

紅より小紋あり〜るを云

肘ハ長下ハ勿論の
 事天子ハ下
 一ツありハ
 衣冠の肘ハ三位
 以上ハ二ツあり四
 位ハ下ハ二ツあり
 色額ハ二ツあり
 トハイクツ着ル
 トモ上着ノエリ
 ニテ下ノエリヲ
 包ミテ着タル
 ヤウニ見セテキ
 ルヲ云也



人ハ尾蓋也と条々書き乃又諸國書条々物を書き
 ふるふ干とり内ハ志望を折てまぐる也六十より外ハそ
 うらうらまきまき也とありまうらうらびと小袖のあり
 を折すしとありの也あつら成爲は折す也也
 うらうら僧綱也僧綱と僧の位也法橋法眼法印を
 僧綱と云は位ある僧ハ志望して夜と衣のあり立
 て頭をくすむりてある也小袖のありを折す
 ておすれハ僧綱の衣まぐる形乃とありあつら
 うらうらひと云也
 一大ありとある小袖の書を廣くあけてある也

一女の小袖はむらうらとる物あり鎌中旧記は四月六日
 たりとる物のいふ所もよまらぬ物ありとあり
 あつらとる物ありとありぬの事也とあり
 禊りハ金銀の箔と繪極をまぐる紐をまぐる赤と裏
 付くる珍事也

一木綿ハ桓武天皇は時延暦十八年三河國ハ崑崙國の
 人ハ船よ来り漂来しとあり船中ハ木綿の種あり
 を諸國に植へしとあり由類聚國史にあり
 永禄年中つとる異國より種を供へ来り今
 日絶すと云々蛭川記にも人ハ袴のあり馬具寸法

是木綿をよめる
 賦也木綿の種乃
 散あり

記もんめんまきういのう本綿と書てもめんとよ
む也くつむつ五身通すお古いもんめん云ひ也

一か織物かかおまゝ別也か織物をか物と云也金

補修子ラントニスレユスアヤミキ綾錦キと外まて唐より渡りたる物に皆織物

也か織は日印等織也地に生糸を紋うひ五色の糸り糸

金糸等をまてて浮織とある物也唐めとて織物ある

ありありと云也

一板の物と云は巻物の利一云云也織物を巻くると云は巻物

と云ふ人よりす板を入りかたたるなる板の物と云

也武雜記は昔のどんまのまにいであつてとて今い

巻物人すまゆとありどんすも上古は板の物ありしは

は巻物もありしを云ふはたしは板を入りしは

と云ふは何れも板の物ありしは出しは板の物

と云ふは織のものを板の物と云へり蝶川記はあつ板の物

板と云ふはすき板の物ありしは板の物と云事ありか

織の厚さとしてすきと云ひ也

一婚禮は向き小油を用ひ奉葬禮の學也と今世上は

人ありああやまり也葬れは白色を用ひるは

亦重ハ美ヒレイサイ麗イロトリ彩色をもあず物をうけざるを云ふ事

法也婚れは白色を用ひるは婚れは人倫の大は白色は

白色の大巾也故は白色を用ふ也用ふは白色に同
くも本意に同くもさる也又産の村白色用ふは
も婚禮に同く

一 どのぬまはと云ふ今の夜具のゆ也又杉入も云也この
ぬ物に袖の下ねくびあり妻の服よ七寸のふらけ付也
婚入記にあり名合く後傳に武雜記の貞丈抄記に也

このぬ物の袋よ入る也
とれはこのぬ物の袋よ

一 夫杉入もと云ふはねまの事也常の小袖の形ありゆも
けをいやくす也このぬ物の一名を杉入と云ふこのぬ物
ありはたふさきか小杉入と云也

先字は三五
あつこふあま色
ぬものぬ物ニ
と物入ニ也
二四印一ニ也
あつこふあま色
ぬものぬ物ニ
と物入ニ也
二四印一ニ也

一 今世の夜具の内は蒲團と云物あり古くは
貞丈抄に記すぬ物ありと云ふは
今世の夜具の内は蒲團と云物あり古くは
貞丈抄に記すぬ物ありと云ふは
今世の夜具の内は蒲團と云物あり古くは
貞丈抄に記すぬ物ありと云ふは

腰解トア
 リモノ又キトヨ
 ムヘシ宇拾遺
 卷九亦五條ニた
 け之うにおせら
 るるものあり
 いけりしもの五
 十げりありた
 刀さきいんさき
 もさきいんさき
 リ三
 宗五祀ニそそ
 ばきとあり

何やまう也夜のまをねをへん家まへよ海のおまへいも海
 すうりともま由也古ハまき子のよまむらやまをまへい寝る
 なり あまんの子孫又調度
いかにまきすん

ちりまきこころハ今のもちまの事也古きやまんの事を
 はくまきまをねるまきより下より物也まきまき
 をへるまきまきと云也今もまきまきと云もまきまきと云も
 云あやまりこころ也まきまきまきの畧語也

蒲團の事右の事記まきまき東山の事也東山殿の同朋相
 阿弥の記しる物修書の西指菴の納戸の内は曲录乃
 上の蒲團の事ありまきまきの事まきまき也

合羽あひと云物古くあき物也合羽ハ近代の物也ソレハ侍も藝
 師もカランも也各々関書ハ御供の儀もまきまきをめいといとあり
 うんまきと云物阿蘭陀の物也阿蘭陀の人の上はまき衣服
 まきまきと云物ありまき形をまきまき作りまきをまきまき合
 羽と云始まきまきと云まきまきハ後ハ袖を付する合羽を
 作り出さる始まきまきと云まきまきと云也

一方の女乃帯今此帯の物まきまき度まきまきありまきまき
 あまきまき物ありまきまき帯也貞衡云まきまき帯ハ裳袴モと云
 物の帯同まきまきと云也まきまきと云中まきまきの子の紙を
 へる上臈ハ惣括合まきまき也まきまきハまきまき腰まきまき

腰解トア
 リモノ又キトヨ
 ムヘシ宇拾遺
 卷九亦五條ニた
 け之うにおせら
 るるものあり
 いけりしもの五
 十げりありた
 刀さきいんさき
 もさきいんさき
 リ三
 宗五祀ニそそ
 ばきとあり

ナリまきとせず
さくまのついで中
帯と云也さけ帯
をきくものすけは
げずるある
小さく帯のわく
おち他 かやハ
帯うまをさくま
さく

をさくす紅梅あざよめやきりる分金みぎも也
裳袴ふら家上鴈装束の上は裳きりる物をめす也裳を
免ふ時忌むも袴を裳袴きりる也紐の袴のよ也は袴
の下はすも帯きりる同いふさけ帯を作も也金きり
さくハ一面は金きりる也者よるさけ帯めすむすひ下
体也は帯きり地ハあけぬさけ帯あす
さくまきりあけぬも織す成きりる条きりる古帯も
さくまきりあけぬも照院殿代よりいふりあけぬ人さく
帯ハ云ハさくまきりハ一幅をきりるさくまきり人さく
帯ハさくまきり男女子よるさくま也 文の帯の目録
さくまもあす

一 襦袢きりる名さくまきりる也産衣書也さくまきりる小児
アンニヤウカ 誕生時陰陽師の作付られ小児の性命を吉きりる
久ぐさくまきりる色は深きさくまきりる古法也然もさくまきりる後
あき耐ハ白と空色 色きりる さくまきりる法也貞衡云也世系
もさくまきりるさくまきりる古ハあき事也
一 婚禮の村よめ君の衣裳ハ上忌まきりる也きりるを織きりる白
き後を忌も也嫁入記よりさくまきりるさくまきりるさくまきりる白
き後とあるを句切をさくまきりるさくまきりる衣裳法ハ昔もさくまきりる
さくまきりるさくまきりるさくまきりるさくまきりるさくまきりる
一 小袖ハ好まきりる袖とさくまきりる昔ハあき事也旧記よりさくま

す小兒ハ陽氣ちうぎの久く入いるるの熱氣ねつきをももくく書かるる病びやうををくく
らふ事ある故小袖の左方の服袖の下に透し口をあけてい
きをぬら也袖を長くする事あり一昔にきあけては也
簾中旧記よりきあけと云事あり今ハハツら
とちきあけの袖袖の下に透し口をあけて今
あり袖の短き物の極まりなり次別一は袖を長くして
風流よりしる也寛文年中の比近ハ女子のあり袖を尺四五寸
けあるを十六七歳の人あるをせ比ハ大あり袖は昔あり
長袖也と尺も由古昔に物語也今ハいひよく長あり
尺四五寸ハ成る也あり袖ハいひくあり昔ハ袖と

女の袴と云事あり

摺入るより
下袴ト云ハ
あり其書ニヨリ
ヲ科簡スヘシ原
平盛氣化卷十一
後倭布ハハハハ
ノ糸ニ後ハハハ
下袴カキ後ハハ
ノ二尺ハ寸ノ太
尺隨分秘藏シタ
ハサシテ髪ヲ乱
シラツト入ハ此
下袴ハフントレ
ノ事ナリ
古今著聞集卷十
馬鹿ノ部ニヤヤ
ノ用云々ヤカ
子テタウサキコ
ナカハレタリ
同相模ノ部ニタ
キテ子リ出タリ
宇治拾遺卷十二
袴ハ度後祭の日
まくんぐありた

一 下したの帯おビト下したの帯おビとも云ハ小袖の上は袴に帯の事也装束を急すは装束の下にあり下は帯ト云也下は帯ト云下ハ帯ト云下ハ帯ト云

一 ぬいどぬいどハ名なたああささききとと云又手て繰くとも云是上古より此名也字ハ摺シ鼻ハ禪ント書けども非あり摺鼻禪、別あり今ハ房州の人ハたあさきとも云也田舎ハふもき海も残りて有也あさきと云ハあさき也あさきをあさきと云す
あさきをあの代りハ綴布をくすあさきと云也

人ぞ...云物古いた川あとも 義貞記曾我物語 まごみおびも

以異阿兜虫 盛衰記ニテリ前ニ記ス 又依 よたりのありあり 又依 まごみおび 物也皆 まごみおび の事

也唐韻又松小禪也 もろく唐ふり 松小禪の歎 あや日 此

たふさ まごみおび 合ねとも和名抄 まごみおび 松小禪の下 まごみおび 物日

印のたふさ まごみおび 禪の下 まごみおび かく物ある まごみおび 義理を まごみおび へ

字が用 まごみおび の也

一 イマキ 今本 トニマキ 湯巻 トニマキ 同物也 イトニ音相通故ユマキヲイマキト云ナリ大江山ニユ

ルニ同 東鑑卷四十一建長四年 子 四月一日ノ条ニ 湯小袖十

具御大口 ト 唐織物御衣一領御朋衣 ト 今本 ト 又榮花

物語 初花ノ卷寛弘五年九月十日中章 云 湯ゆりの酉の時 あり

紫式部日記云唐
ゆりの草おの
君のゆりの草

女房 まごみおび 白き装束 まごみおび あり まごみおび 湯巻 まごみおび あり

同 ト 事也 ト 禁秘抄 恒例毎日 早旦供 湯主殿 宦人奉行

近代系 釜殿運湯 中畢 凡禁中着湯巻上臈一人典侍一人也

是候御湯殿故也 ト 壺井義知力校正ノ禁秘抄ニ湯巻

二白生衣ト注シタリ 貞丈云天子御湯ヲ召ス時上臈一人典侍一人ノ典侍ハナリ

一 書記 ト 中小子綱 ト 事あり馬の子儀 ト 事あり ト あり

たふさ まごみおび の事也 たふさ 衣 まごみおび の歎 まごみおび 綱 まごみおび あり

たふさ まごみおび の事 ト 公 ト 體源抄 ト 書 ト 義家

書 ト の 體源抄 ト の 次 ト 記 ト あり ト 条 ト あり ト 綱 ト 分 ト 二 ト 小袖

當用被_{まか}に_{まか}倍_はに
 衣_えの_の先_{さき}を
 尺_{ぶち}一_{いち}寸_{すん}あり
 衣_えの_の先_{さき}を
 尺_{ぶち}一_{いち}寸_{すん}あり
 衣_えの_の先_{さき}を
 尺_{ぶち}一_{いち}寸_{すん}あり
 衣_えの_の先_{さき}を
 尺_{ぶち}一_{いち}寸_{すん}あり
 衣_えの_の先_{さき}を
 尺_{ぶち}一_{いち}寸_{すん}あり

又殿中日記 新嘉坡門 云寛正六年八月十三日御風長御成候
 傍殿三十一献例式以く_も重す御湯か_らひ_きり_は候_に
 馬の子_こ駕_があり_はい_はし
 此太極_こ一_{いち}風_{かぜ}あり
 馬の子_こ駕_があり_はい_はし

一 衣_えの_の先_{さき}を
 尺_{ぶち}一_{いち}寸_{すん}あり
 衣_えの_の先_{さき}を
 尺_{ぶち}一_{いち}寸_{すん}あり
 衣_えの_の先_{さき}を
 尺_{ぶち}一_{いち}寸_{すん}あり
 衣_えの_の先_{さき}を
 尺_{ぶち}一_{いち}寸_{すん}あり

古_{いにしへ}の_の衣_えは
 尺_{ぶち}一_{いち}寸_{すん}あり
 古_{いにしへ}の_の衣_えは
 尺_{ぶち}一_{いち}寸_{すん}あり
 古_{いにしへ}の_の衣_えは
 尺_{ぶち}一_{いち}寸_{すん}あり

一 古より女はよく出_でた_らし_うづ_みを_する_也今も京大阪あらし女は
 うづみを_する_也ふ_くる_物語_あら_はし_きぬ_うづ_みの_女と_あら_はし_はい_はし_也
 也古のうづき_は白_{しろ}く_もの_小袖_{あり}古_の物_語より_すき_ぬ引_き
 うづき_あら_はし_もあ_らし_もあ_らし_もあ_らし_もあ_らし_もあ_らし_もあ_らし_もあ_らし_もあ_らし_もあ_らし_も
 うづき_あら_はし_もあ_らし_もあ_らし_もあ_らし_もあ_らし_もあ_らし_もあ_らし_もあ_らし_もあ_らし_も

一 古より女はよく出_でた_らし_うづ_みを_する_也今も京大阪あらし女は
 うづみを_する_也ふ_くる_物語_あら_はし_きぬ_うづ_みの_女と_あら_はし_はい_はし_也
 也古のうづき_は白_{しろ}く_もの_小袖_{あり}古_の物_語より_すき_ぬ引_き
 うづき_あら_はし_もあ_らし_もあ_らし_もあ_らし_もあ_らし_もあ_らし_もあ_らし_もあ_らし_もあ_らし_もあ_らし_も
 うづき_あら_はし_もあ_らし_もあ_らし_もあ_らし_もあ_らし_もあ_らし_もあ_らし_もあ_らし_もあ_らし_も

儀注記ニ法師の
がらも孝ニハ
ききされハ
ゆりてい
わひゆる
つうやう
ゆつてい
ゆりてい
とあり
やうと

ヤハはきん
一物之利
のうり物
考之利

自丈換方より
本ハ横若の
ナトき人の
物とあり
一のきぬ
あけよ
きよ
ちめ

中府ありて世に用ゑる也同條付く文をあやしく添へる小袖を
忌む也今月中忌む文をいふもいふも其のやを今小紋とも
の也藍を添へる小紋の小袖の事也

一 法喜人の事 蟻川記云頭巾は免の多う川きひの色をいふ是
けつすいひの頭巾は形めやちあきすい古の何事か
ありていふ物なるは頭巾も今の世にすし頭巾あり
を用ひていふ

一 ありていふ法喜人の判後者のかぶる頭巾也源平盛衰記太
夫坊慶明ハ首丁頭巾なりありめの禮を忌む又首丁頭巾
巻あがりあんごう下あり又平家物結土佐坊昌俊黒草

禮あり首丁頭巾を忌むありあり鎌倉年中行幸成氏の陣
の事を記し御力者或ハ十人或ハ八人又ハ六人何れも出長頭巾
て黒布ありていふありありの方なる廣く一の中一不むあり
るありありの白き事絶え添へる小袴引髪付たりありあり
重首丁頭巾も出張頭巾も同物也又頭長頭巾も書也出陣
乃時をいふあり物なり用ゑる物ありあり

一 今世世七月七八八月朔日七月十五日の必白くこの日を忌む
事いふありていふハ白をなする由旧記に見えぬ
宗五大双紙
外旧記
有云ありていふハ白をなする物古
五月五日の必白くこの日を忌む
五月五日の必白くこの日を忌む


厚衣を長すり也
 うりあなりぬ
 の服ありお備
 又及びありし
 うらひらき車
 也うらひらき
 色を白とす
 平根元あり
 宗五大双依男
 若き老く
 白きうらひら
 合ん
 一本男若き
 白らきうらひ
 うり

用ひて成へり五月五日に限る保つてむが思すしりし旧記
 八気えさる也白を用ひてあへり人の説は七文中八朝
 小白くしむ用ひ事秋ハ金氣の氣也金の色ハ白とすか故
 上くりハ流あやより成へりハ流のめくあへり其ハ火氣の氣也
 火の色ハ赤しとす前五月六月ハ赤きうらひらを用ひ也可
 阿流流子衿のえかよするこ入の小袖ハ花色のあへり小袖
 を和式とすされハ今四月朝ハ必乃ハ衿乃月九日ハ必
 花色はあへり小袖を思も也といへりハ流あへりしめのみ
 考ふに記すあへり古のめ小袖と云小袖と云各同あり
 奉公覺悟記云九月九日より小袖を思ハハ衿をめつけの

小袖と云きり小袖也とありそ名つけの小袖のみ前記す如
 花色小袖を用ひてはあへりしめ小袖と云小袖と云別
 を定うらひら京都將軍より後代の事ありと云
 一旧記ハ紋をぬのめ付ありとある今附きうつけ紋と云
 同一事也紋を別おきききりて作つてぬのめ付あり也すあへ
 のきりしめぬのめ付ありとあり其もぬのめ付の事也
 一信合と云旧記あり其信子金襴と云りか畧して二品
 をつよひしり也鎌倉年中行事ハ公方極以韃靼信子
 金襴也とあり二品あり事ハ初ハ書れ案ハ芳れ被
 見ハ信合一端上信ハ信合と云又言あり其信

目録ノ目ハ五ノ
ノサハ目也

金の金糸字ハ子の字を書くとくあやまりて金の字が書くとく
形も一様金二品也

一目結ユイと云ふ形  如長目の形ユイの如く也是をいふもあじ又
ハあじとて深也是を深ユイと云ふ結をつまみあげ糸を結
て深ユイ後糸をいけが糸のあじと云ふ白く感々たの如く
目の物ユイあるは目結と云ふ也亦結ユイの深物白星ユイと云ふに
ありて鹿の子ユイ毛皮ユイ小似ユイたる如かユイのあじと云ふ也ユイり乃と云
鹿乃子也又佐々木氏ユイの家糸紋ユイをよ川名ユイのひと云ふ也
の目ユイのむを写ユイ並へあるは四目結ユイと云ふ也 あじ目ゆい
の事末記
一村ムラ濃ユイと云ふ地ユイをハ薄ユイと云ふは村雪ユイのこユイと云ふ何色ユイもては

玉浦家ノ紋ユイは
りぢうと云ハ別ノ
事也末記ス

夫木坂ユイ快言法師
の歌ユイ田原ユイの
山ユイのむと云ふ
をいふはちむね
らと云ふ人
又夫木坂ユイみみ人
あじユイ秋ユイくわい
いユイよりユイらユイは
はぢユイらユイらユイ
と云ふ事也

是丈ユイ三ユイ鏡ユイの二
字ユイヲキユイトユイト
ヨムユイニユイ子ユイ細ユイア
ルユイハユイ鏡ユイの二
字ユイハユイ水ユイ干ユイ長
鏡ユイの二ユイと云ふ
也ユイのあユイのあユイ
九ユイと云ふはユイの
成ユイと云ふはユイの
らユイと云ふはユイの
ハユイ鏡ユイをユイと云
ふと云ふと云ふ
いユイの事也
物ユイハユイ一ユイ字ユイハ

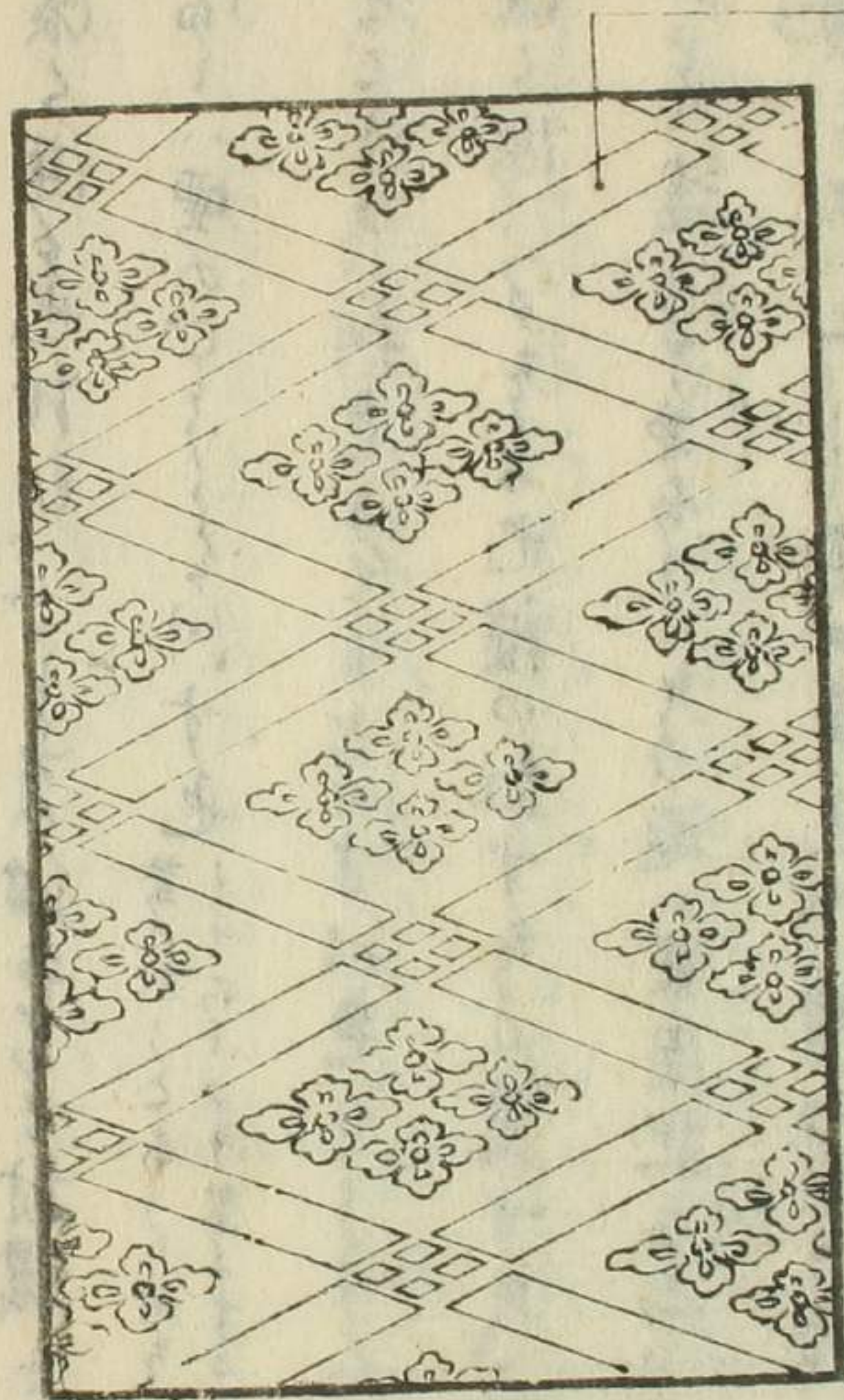
を濃く深く也紺むと云ふ紺色を云ふ村濃を云ふ也濃と云
は端々ハ煙のじと云ふ也 紫のあじと云ふは地をうすあじと云ふ
一 是をこと云ハ何色もては上の方色をうすくすすの方を
ハ濃く深くも云ふ也禮の紅すを云ふ紫すを云ふ右の色也禮を
云ふこと遠くも云ふ也 紫のあじと云ふは地をうすあじと云ふ
一 顔ユイ顔ユイと云ふは一色の事也今時ユイはあり深くハ物也大志
何ユイを云ふは一顔ユイ顔ユイの二字を云ふはありと云ふはあやま
り也と云ふは名をよむ字あり
一 婚禮の時ユイは君の衣裳ユイを云ふはと云ふはと云ふはありと云ふ
さあやを云ふはと云ふは婚入記ユイありと云ふはと云ふは

タトヨム幸也
上ワタトヨム
夫木抄、修理太夫
顯季、竹ノ翁、
幸し、にゆき、
の帯を、まゝ、
赤、ち、芳川、
又夫木抄、おし人
あ、に、か、い、
ゆわ、ち、あ、い、
ま、の、あ、い、ん、
ハ、飯、の、の、め、

さいごひ
のひの夜
あは

も知ろしる故あまども今たは後果をあらはす也今人の
まゝなる事をも書さおとくもさる也後よ人のあはぬ世の中にあ
りたる時の事也古人もこれ人の常に知る事秘記に
ころる今用子立事ま

式正しありありありあり



さいごひの夜
あはのひの夜
あはのひの夜
あはのひの夜
あはのひの夜
あはのひの夜
あはのひの夜
あはのひの夜

さいごひの夜
あはのひの夜
あはのひの夜
あはのひの夜
あはのひの夜
あはのひの夜
あはのひの夜
あはのひの夜

襦袢の二字ありきそのむ也昔小児乃衾の幸也

元永二年或秘記云五月廿八日皇子降誕
帖平舘の以襦袢一帖を宛む

子總こすけ云今小児の大小使の用也小児の腰より下
巻きまきなる物をあつくと云下は何なにもあめあめ云物也誕

生記なまぢ子襦袢とあはははも志ち也

赤子の衣服あかこのもてを筒袖つつうでと云むら袖そでの事也

あけの...
夫木...
けめ...
ひ...
は...
...

あ...
紅又ハ唐紅ト書
也唐土ヨリ傳
ト云物...
...

を帯の小袖の...
也産衣を...
初を...
...

一 赤け...
...

目録の...
...

一 みどり色...
...

き也...
...

一 くれ...
...

ハ紅乃色...
...

一 うす...
...

ら...
...

一 あ...
...

也

一 ち...
...

一 ぶ...
...

一 真紅...
...

一 帯の似せ物...
...

一 女の帯...
...

一 赤大坂...
...

一 あり...
...

一 と...
...

一 川...
...

地下ノ女ノ...
...

一 小袖カガの形カガと云はうろこ形の事也カガいりあともうろことも云
つゆの事也奥の懸イロコのうろこありうろこ形カガめ氏シツカト之南カガあり
それと似せり△め氏ありをいりうろことも云也

一 小袖一重カガと云は小袖二つのめ也但小袖の袖を通しカガまぬ
凍カガありす二つの小袖を別カガつみまぬるを云也
酌カガ并記カガ云小袖カガくは出カガ中界小袖をうりハハ川カガの井
うろこすしと同やうは多むし一又書札并雜カガ肉書云小
袖一重と云は袷カガハ不入りうろこ小袖二の事也小袖ハハ川カガめ
いり重カガれいり免カガはま重カガきいハハ川カガたも
うろこすしと云は袷カガ云也又酌カガ并記カガは袷カガあり重カガと云は袷カガ

一 女カガの形カガと云はうろこ形の事也
つゆの事也奥の懸イロコのうろこありうろこ形カガめ氏シツカト之南カガあり
それと似せり△め氏ありをいりうろことも云也

一 女カガの形カガと云はうろこ形の事也
つゆの事也奥の懸イロコのうろこありうろこ形カガめ氏シツカト之南カガあり
それと似せり△め氏ありをいりうろことも云也

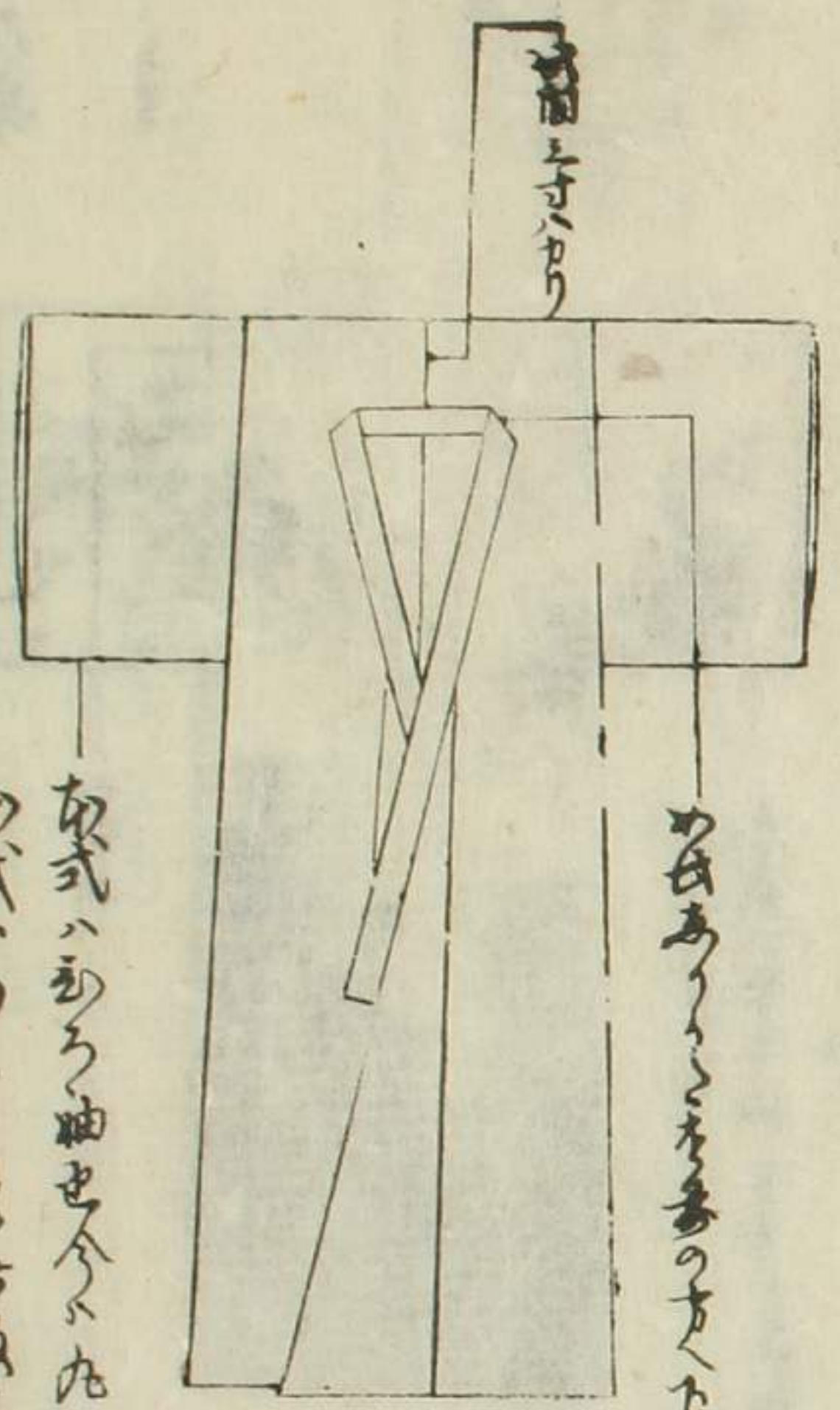
又すも左右乃
 和の關より引直
 此の關より引直
 此の關より引直

のしよは打ちけし肩をぬいて腰は海^巻あり
貞丈三様表に用ひし物也

一 髪はくしと云物を小児の衣服のまやうあはふ付々古き
 あら事也穿つてしと云古書ゆゑに云物あり近世ハ少袖
 とも何れもも襦の物も必穿るを用る也

一 ぬき海ハ上古夜うぶりて痛物也このる物今のよきあは後
 出来し物也ふすぬしと云字ハ衾也雅亮装束扱はる御
 子海ハらさあるのうらうら袖あつらひハ尺又ハのら五
 の物也此のの方まらねあるの御りいとをフトウスレふすり
 二 髪あはくしと云物もさうばうと云ぬき也をわ頭の方く

海くしと云物もさうばうと云ぬき也をわく
 中其のうらうらのうらうら御りふす海ハ袖ありと云物
 口角あり髪をさうばうと云ぬき也
 一 かんまのあはのしよ



取式ハ袖の袖也今ハ丸袖のしよ用る
 取式ハ白くしと云物あり

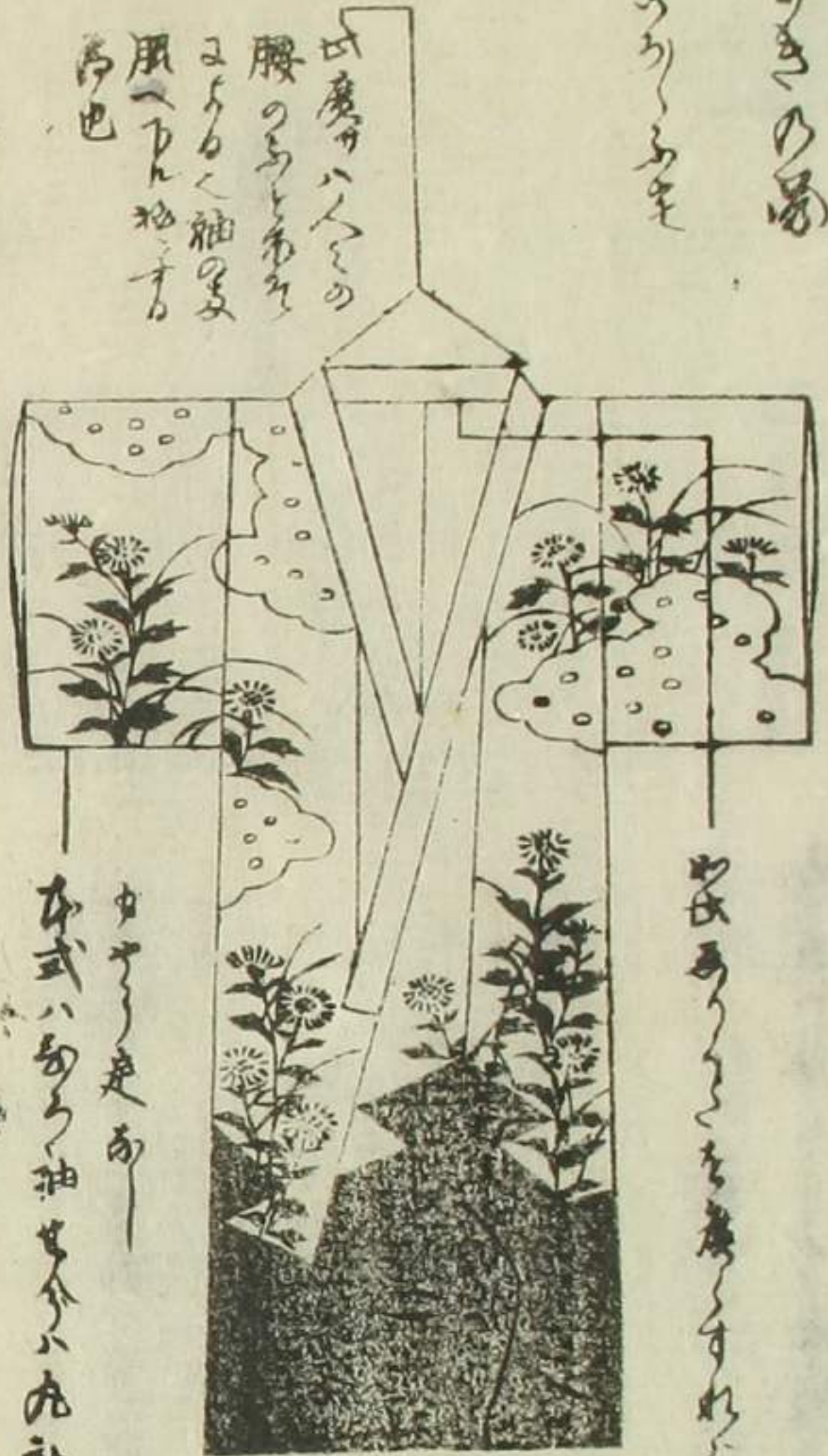
雜記三

三十七

わあつと云物を方ハと云ぬき也
 ぬきと云物あり
 うらうらと云物あり
 色ハ白くしと云物あり

しるべきの家

きつりふき



腰のあたり
袖のあたり
裾のあたり

式ハあり袖も分ハ九袖ト一層ト也

カ廣クも也人の家のあつても
みよる

ありあつても

一うちをきの物ふ地もんをうけおつたよる物也増入
記よるるる

一天子の御紋と云事上方の事也源平の合戦の比と
多御幕あふ菊桐の御紋を付始と云事

故実難く圖書云
ユカタヒラハ十
九サラシノ間ヨ
クハ軟工チコ布
ナトハセヌナリ

元来ハ御装束の織紋ありそれを武家共是紋の如く御幕も
も何れも付け用のしぬ一黄檀染ト云御装束ハ桐
竹鳳凰麒麟の織紋あり赤色ト云御装束ハ桐竹の織紋
あつたり又窠中ハ八葉の菊同菊ハ草の織紋あり
凡人ハ紋ヲ道具のおろひあどま付ルハ人の物よまきれぬ為天子の御物ハまきる

一十九布と云事旧記は有方袋あつする布之機を織者
初系ハ筋を一か糸ト云長サハ一疋の分りも
あり七ツの布と云ハ七ツの布を織るを云一幅の徑系式
るハ拾筋ニ重なりあつる
六十筋ありあり十布と云ハ十布を織るを
を云一幅の徑系式ハ二重なりあつる
十九の布と云ハ十九

ばま織る也一幅の徑糸七る六拾筋二重よりすゝめを五五
式十筋ありあり
松細はうのくき布也右幾くむく言ハ皆たて糸の分
量也一くむむを一よくとも言也糸紋後へ返す時の句
也布の細きく藤きくふく箴も聲も也弓馬故実云弓袋
の事中畧布八十九と云布也さうあふ世多々ある布こ
只此布のうのくきをを用へると云

一 柳色の袴と云旧記に有柳色と徑糸タテと緯糸ヌキと
色を望むく柳くも也多くとバ紅梅の郭也紅梅タテカウ
さきヌキ
紅糸の聞書云織色の袴あふありと袖とをさぼ之
云御供故実云袴の事く留可然に近年柳色の

袴ありはくありくめく方中の柳色袴あはせ共共
御割禁もつくる妻代ゆめくねく女くありはく
言志ありゆめ角用ゆめ不可然く柳色く小口袴ゆ
きり柳色あま

一 袴がを折ると云ハつどが花とよを畧して袴がを
云く也袴のの花ハ赤き物ある如紅糸を染るるをへ外花
と云也物をくはくすくあるを染るるをいふあり
そのくを法くがを折ると云也その後ハ元々くつど

がもふもみぬ 袴ハ土佐が
繪あり歌つどがもあり



白順衣装次方云
下際を先登りに
てくすく際を扱
て上をこくも
はくいふくある
をくはくはく十
レハ其地色ハ色
マルベレ其止
ノ際タル形ツジ
カ花ナルハレ

職人歌合ノ奇也
其口寺ノ職人等
合トハ別也

熊谷蓮性法師ガ
古の禮ニありて
うみこらん風の
るる矢ハこもら
ざりや
古今狂歌集ニ見
えり

春風桂川のあゆを挿ハシをいづくハシきくハシ袂も流ハシ一の花を折ハシる近衛信房

一紙衣も古より法皇大原あま源平盛衰記卷四十八入部ノ条ニ云思ハシて

疲ツカれ衰ヲトロへるラウニ老尼カキキヌの紙衣ユの上ユ濃ユき墨スミ際ツメの衣ユをユぞユ思ユへ

りリ々リゆリ云リ又リ曰リ条リ白リ小袖リの怪リ多リあるリ麻リの衣リ紙リの御リ衾リ

より具リ一竹リの掉リはリ想リへり云是ハ平家ニヒテ後建礼門院大原ノ里ニ唐隠居ノありテ衣ヲ紙ノあリすハはシをリうケけリ

一樹ウチキ大樹コウキ小樹コウキ衣キヌ袖スリーブ等ナニ其ノ事ヲ装ル米ノ部ヲ記ス

一家ノ故ト云キ事源平盛衰記ニ云素三十三三十六熊谷ノ熊谷ハ禊ノ虫出家カキ

の故ノあリてハ旭ハト又ホ寓ホ生ヤをリ繼リつリる云

一あリきキ色ニ二ニあリきキ黄キとシ淺キ蔥キ此ハ二色也先淺キ黄キとシ

黄袍黄ヲ黄衣衣ニ云ナリ

うキすキ黄キ色也無品親王其ハ御袍の色は黄とシ用ケるハ黄袍とシ

以事也無品親王の御袍の事淺蔥とシ云ハうキす青也水色とシ

白襖とシ云ハ襖ハ青あり襖ハ赤ハ装束の名也也葱ハきと草也也也

也ノ事也の色ハ黄とシ用ケるハ黄袍とシ

葉色はうすきがゆりありて淺蔥とシ云ハ中古以来淺蔥とシ

淺蔥の差別をあリすハ一色とシ用ケるハ黄袍とシ

の色ハ黄とシ用ケるハ黄袍とシ

一カエギ色とシ用ケルハ黄とシ

葉ノ萌木色と書也萌草色と書ハあやまり也木ノ定色

用ケるハあやまり也木ノ定色

カゲアサギト
ハアサキノ黒
アル色ナリ

カゲモエキ
ハモエキノ黒
アル色ナリ

聖徳太子神事の時
長生天皇の御
衣は白布と山ありの
葉を色くすのり
に染すといふ物
あり

あまのふりすり
は奥州信夫郡
あまの石の面を
布を打きせしむ
ゆきめをすりか
しむる物ありと
す

色をいつくしりとも色あはくありしるを好みたりとも也

一すり衣の事^{ユロヒ}あつちぢり花ぢり衣あはく歌みよあり

是六板の草木花鳥あぢり形を彫刻^{ユリキサ}して白糸のり紋布を

色してそおあぢりの上を打すのりを付す八絛布のまじり

あうぬ為也のりをあぢりし付すその上は布又八絛あぢ

をりあぢりよあぢりしつるまじりこのおあぢりある也その

藍^{アヲ}お葉又ハ色くの花を銘^メくは布を色くして布絛あぢり

面を摺せむ草木花鳥の形あぢりし也

一鳴ずりの虫^{盛衰記卷五小松}とてハ鳴ず洲^{スサキ}の形を前は

めくすりしるをす也^{今時節を際すのりを好むのありしりしる}

一うさぎのりしるはあぢり世の服のまじりし事古記

何り曾我物語^{卷九尾才}十筋がそお夜の出立は白きりぬ

ひしおしあぢりかきしるにむぢぢりの虫垂乃袖を結

ぶく肩よりけ^{中畧}五筋り装束あぢり世お小袖の服ふり

らうきしるを狩場の用意あぢりしるはあぢりしるはあぢり

あぢりしるはあぢりしるはあぢりしるはあぢりしるはあぢり

あぢりしるはあぢりしるはあぢりしるはあぢりしるはあぢり

あぢりしるはあぢりしるはあぢりしるはあぢりしるはあぢり

あぢりしるはあぢりしるはあぢりしるはあぢりしるはあぢり

あぢりしるはあぢりしるはあぢりしるはあぢりしるはあぢり

あぢりしるはあぢりしるはあぢりしるはあぢりしるはあぢり

あぢりしるはあぢりしるはあぢりしるはあぢりしるはあぢり

あぢりしるはあぢりしるはあぢりしるはあぢりしるはあぢり

あぢりしるはあぢりしるはあぢりしるはあぢりしるはあぢり

海ス素襖アツあぶりのめく左右の服をぬいずあけて着る也
うきあるハ關クワンする也あつせのときうきするともさても大い
らゝ裏を打ちする也大いさむる事装束の部に記す
一海ウミきを名とするハ留めても布きてもうきく巻くは上を細き
留めてうきくさう何色あつても留る後巻くは留るさげはさ
くともあつるハゆるあつ也紅卷條の事装束の部に記す同也
夫木抄の家集藤花源仲正の歌、巻條のよきをねぬ
むらさきさかひさきくさきある松うきを名海云々此歌のよき
ハ所が松よよねくさき付き花さきくさる部が紫の巻を
名の衣を名くする様も名也也

一ゆき一あクキくさキ紅の色をさる也深紅フカキとく紅の色をさる也
く黒くあクくするハ禁色也禁色キンシキくハ平人の忌はゆきを禁
割カせカくも也キ禁色を割カくハ帯紅オビベニ條をカくハ色
とく也キこれ名もあつるゆきさるハゆきり

夫木抄の歌久安百首有芳門院ノ安藝ヤク山ヤマもモせセもモ也
流ナるナハナ佐保サホのノあアみミくクがガぬヌぎギうウけケ一ヒトゆユきキ一ヒト色イロをシもモ云ク
山もせよハ山もせよをきぬまとも初とさるゆきハ春の節の名也
下トの紅あつるをさるゆきハゆきりハ色の衣をぬきぬきせしむる也

一きりキリ上ウヘハハ黄キ色イロ中ナカハハ紫ムラサキ下シタハハ緋ヒ色イロをシもモるル也キさサらサせセもモ黄キ色イロ
緋ヒとト云ク也キ緋ヒをシもモるルハハ例レイあり

緋ヒとト云ク也キ緋ヒをシもモるルハハ例レイあり
コウヤト云ハ例あり

一奥布オウフと云布上古あり也奥州オウシュウより出づる物歟オウシュウ詳あり

一東鑑トウカンふろし見えあり鎌倉時代鎌倉時代其阿アりリがその後
縁エるあり夫木抄フキシロ光俊朝臣ミツトシの袂タビ今も世ヨある由ユ也
其あミおクぬノもチのハれハあリる也

一古コハハ見ミハハ早ハヤクク綿ワタ入イノノ小コ袖スリーブをバあシぎぎううりり也也小コ見ミハハ身ミ

此温ウレキ氣キ強ツヨき也也也東鑑トウカン卷クワン二十四ニ云ク仁治二ニ年ニ十一月ニ十一ニ日ニ誕生ス也也三歳ニテテ着袴キハシメノノ祝イハシアリシ也也

奥州ノ事飲食ノ部ニアリ又祝儀ノ部ニアリ

月ツキ廿ニ日ニ今日コノヒ將軍シヤウケン家ケ若ニ君ニ御ミ前マヘ御ミ着キ袴ハシメ魚イサ味アジ也也中ナカ畧リヤク其キ後ノチ着キ始ハシメ

縣ケン衣イ給キ綿ワタトト同ドウ字ジ也也着キ始ハシメノノ二ニ字ジをシ今日コノヒ始ハシ綿ワタ入イをシ也也

其時キトキ延ノビ六ロク線セン入イ用ヨウさスりり也也

右ノ若君ハ將軍頼経トシタカ子コ頼嗣トシツグ也也延應二年十一月廿一日誕生也三歳ニテ着袴ノ祝アリシ也

一上古オホコトハハ綿ワタハハ四シ品シヤウブツあり長チカ綿ワタ平ヘイ綿ワタ細サイ綿ワタ兼ケン綿ワタ是シ也也比ヒ中ナカ惠ケイ余ヨ

院イン僧ソウ正シヤウ室シツ守シュ此コノ書シヤクをシ海ウミ人ヒト藻モ苾ヒとト云ク書シヤクもモ久クくクりり長チカ綿ワタのノ

直チキ垂シ源ゲン平ヘイ盛セイ衰サイ記キ長チカ綿ワタのノ特トク衣イ古コ今イマ著シヤク固コ長チカ綿ワタのノ衣イ僧ソウ衣イ也也太タイ平ヘイ記キ也也此コノ等トウ皆カ

長チカ綿ワタハハ綿ワタをシ纏マツルるルもモあリるル也也長チカ綿ワタ二十ニ疋ヒ長チカ綿ワタ二十ニ疋ヒ

疋ヒあリるル東トウ鑑カンの中ナカあリるル也也古コ事シ終シヤウ卷クワンニニモモ長チカ綿ワタ二十ニ疋ヒ経キヤウ頼レイ之ノ許コトへヘ送オウ遣テントト見ミタリ

一袖スリーブをシ此コノ事シ装シヤウ束スツ部ブにニ記キす

一素ソ服フクのノ事シ後ノチとトうウものノ凶キヤウ事シのノ部ブにニ記キす

一懷クワイ妊ニシ乃ノ婦フ人ジンのノ腰ウシ帶オビをシゆキるル也也帯オビとト云クのノ祝イハシ儀ギにニ部ブにニ記キす

一宿シヤク衣イトト云クハハ衣イ冠クワンのノ事シ也也禁キン私シ抄シヤウ上ウヘ御ミ膳テン事シノノ篇ヘンニニ宿シヤク衣イト

アルアルニニ壺ヒヤク井イ義ギ和ワ傍ホウ注チュニニ衣イ冠クワンノノ更シヤウ也也トト見ミタリ

左経記寛仁元年六月廿七日ノ記ニ云長協一疋綿二十疋

延喜式縫殿寮式云新嘗會御服中畧望陀布二條○和名抄卷十

二類望陀布今按本朝式有庸布調布讀豆岐乃沼

能又有信濃望陀等名望陀者上總國郡名也其躰與他國

調布頗別異故以所出國郡名為名也

一帖絹卷絹の事平らたを帖絹と云凡くを

巻物と云ぬり

一六丈細布と云ハ一疋の長サ六丈あり小や今昔物語卷二十二 觀現上人在俗

の村盜賊を助けて物布をばし物語門乃服は皮子をニツあがり

きこふハ一ツハ六丈の綾十疋黄八丈十疋を綿百兩入れたり

今一ツハ白き六丈の細布十疋紺布十疋入あり云

一賤き者此等の袖ありと云物を古くは袖ハ衣乃手

あれハ多ありと云也古今著聞集卷二十 禽獸ノ部下臈の

之云布ヲノキモノ物をもて腰を束と云ありと云

まは

一綿入ワタイの衣宇治拾遺卷一 方十八 條す

色のきぬの綿ありとあるニツ云く増鏡卷五 文永三年 四月蓮華王院

供養の御幸あり中畧人ありハ三輛ハ女房の車ハ

衣也御車ありはくお川はれる上臈ぶらん

袷の五ツ衣貞文云是ハ着タルニアラスウキイデトテ車ノ簾外ハカサリニ見セテ出スナリ

一染色の事仕装束の部あり見合す

寸法雜々云馬ノ
アカトリ寸法ノ
事二尺一寸ニ布
二尺也又五尺
二寸ニモ布ニハ
ナリイツレモ錯
ハ三所ニ付ル也

一あつさり此事女の服也傳来の話ハ汗衫カサミ装束装束のの事也

ハハ備へて世に伝へる事ありと云ふは装束物と云ふに

えざれを身につくあつさり不用く婚入カサミの記家傳ノ古みかた女

あつさり長さ八尺或寸寸ニ七尺二寸と云ふとあつさり

詳ある事ハ知れず難太平記今川貞故殿世ノ記笠翁カサミヲ思案カサミシ

給ヒケルニ赤鳥アカトリヲ馬ニ付ハヤトテ其後俄ニ付ラレキ右青野カ

見 又云駿河國条ニ數十ヶ所ノ所領ハ此後詰ノ恩賞也國ノ

入部シ給ヒシ時我等少年ノ初二テ供シテ富士淺間ノ宮

ニ神拜ノ時神女託シテ云ク遠江國近シテ吾氏子ニ欲カ

リシカハ赤坂ノ軍ノ時我告シ事ハ知哉ト云リ貞世ノ文入道殿座

ヲ退テ何事ニカ候ヒケレ覺悟セズト申し給ヒシカバ必々懺

ノ事ヲ案セシ時我赤鳥ヲ賜シ故ニ勝事ヲ得此國ヲ賜

ヒキト託宣セシカバ故殿其時思合セテ女ノ具ハ軍ニハ忌

事ツカシイタニ事思寄ケン誠ニ神ノ御謀ト信ヲ取り給ヒシヨ

リ以来我等モ子孫モ必ず此赤鳥ヲ可用ト仰ラレキ右富

間神女託宣ノ条ニ見右ニ女ノ具ト云ハ赤鳥を云フ一云也右ニ引

くる婚入カサミノ記追記云々ニツハト云ハ授けられたる女の衣服ト云

ええと云れ共其形いふ物とも云せず猶ほ追記云々ハ

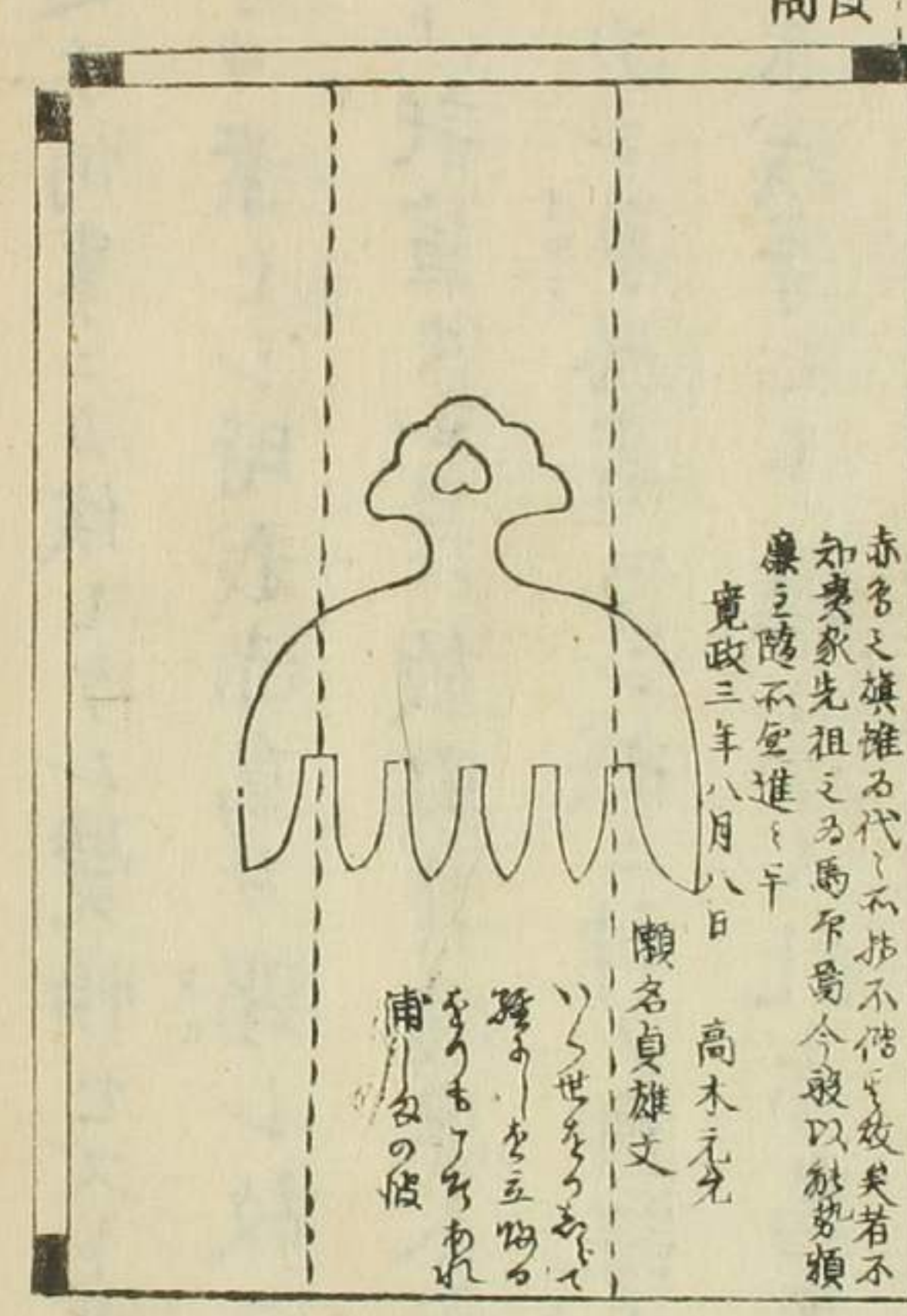
追記云々

光大云赤鳥ト云修字アカトリト云垢取アカトリト云字也垢取ト云

追記アカトリハ
女ノ馬ニ乗ル
ト云上ニ打オホ
テ乗ル打シキ
也
續武家物語ニ果
タリ其文別ニ記
ス波赤鳥ノ借リ
字ニテ突ハ赤鳥
ナルヘシ赤キ筒
ヲ鞍ノ上ヨリ出
レオホウ也

櫛の垢を取らぬと爲力具也この事ハ櫛系也後翁の赤
鳥考に云々 諸并云々 後い云々 此書の
要ある所を取て左記す

○長俊翁の友ある瀬名源太郎貞雄今川家ノ
庶流ナリ所持する今
川義元の馬印として名を以て其家左の如し



今川義元馬驗
垢取之圖
紫皮 皆同
生指三哥四半
細地紋金
堅四尺六寸
横三尺五寸

赤名之旗惟名代不抄不徳也故其若者不
知其家先祖之馬印也今取以辨其類
樂三陸不登進干
寛政三年八月八日 高木元光
瀬名貞雄文
いづれを以て
辨るべき物
を以てし
浦の如し

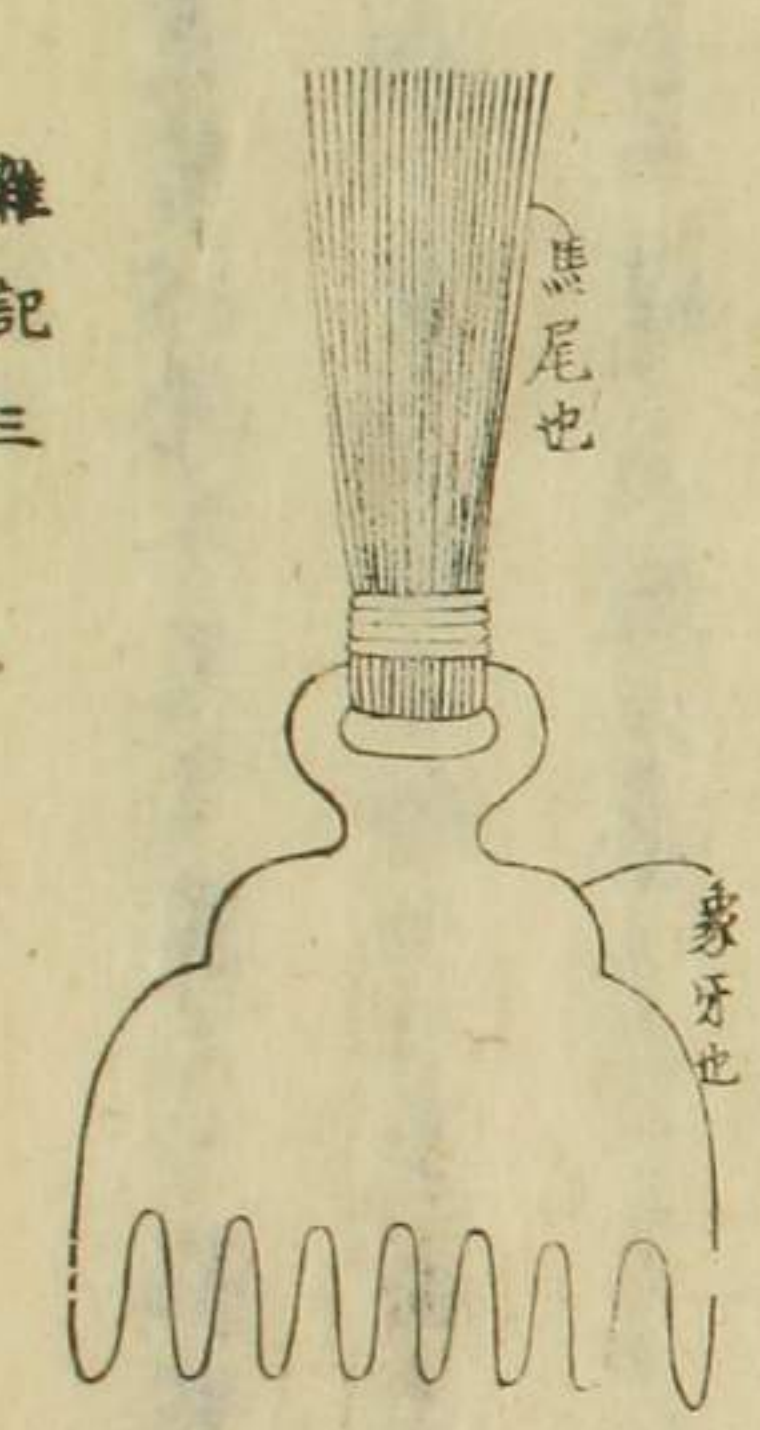
先大云於尾州桶掛る今川義元
討絶之時其本甚本所元直分捕
一々義元の馬印を以て
持傳へり寛政二年今川の
派ある瀬名源太郎貞雄不
一々其法を以て也

○藤巻家れは白井又云所の家紋如左垢取と云の
ふと終



今川義元の馬驗の紋ト同
白井之姓氏出所未記

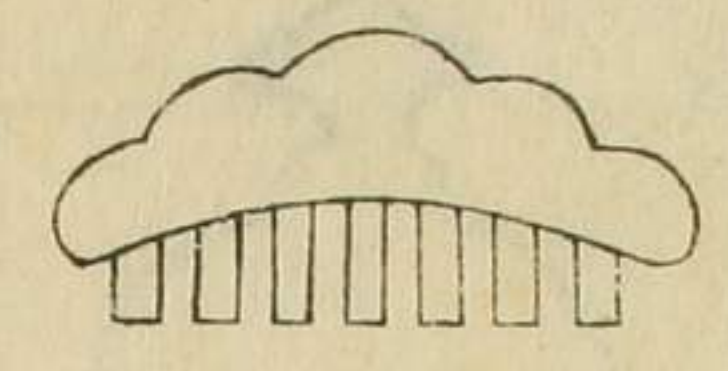
○東照宮の御養女実和平因幡
守康之ノ女津輕越中守信牧由再縁
君の御手道具は垢取と云の如し其形如左



大升如圖上
包みあり
りし出付
存

○是等此馬を名て其とて然らう今世柳拂クシハラヒと云
 物と古の物と形大は是なり故先く假字の赤を以て
 此の種々の説を考へしうり云

○東條西尾乃両家の今川家の余裔ありクニマツ柳松と云もの
 を故に付々もあつころりのかゝの遺りしものあり也



柳松ノ圖
 西尾 東條
 両家之故也

右も赤鳥考の抜書也猶ありし事と云書に附く也

此は人の衣
 子着用は格と
 云ふナリ
 貞順女房取装次
 方云すりの小袖
 とハ白きぬりの
 上は色々の袴の
 元より袴を以て
 一方きいあは結

一 小袖を丸物とし事あり草履丸袴伊勢常真記云丸物と扇
 と太刀の方へ一度は流す先小袖の上は扇を流すは後太
 刀は出しか也又云丸物と袴と太刀を人の方へ一度は流すは
 又川小袖の上は袴を流すは後太刀を出す也云
 小袖を丸物とし事ありは端物は袴と云ふ小袖ハ表裏を異し
 又ハ色々の花ありも甲しをすり多ありすもハ本形は草
 一 摺の小袖の事貞順翁文書に云すり此小袖の事も依て神
 十四五迄は掛袂と云ふなり小袖ハ縁ありの表裏
 又ハ色々の花ありも甲しをすり多ありすもハ本形は草
 木花鳥の形を多しとみたるを右の本形の上は端あり也

上野國新田山ノ
廻ヨリ出ル宿十
ルヘシ仕立宿十
云モ同シ物ナレ
キ

あづきんと云ある等々一林頭中と云四角まじりて頭中
四角ある形等をばうの形に似てせまうと名つけしあり
蓋の字ハ假字あり

一 かの山きぬあま山はむぎ新車室町殿日記云佛小袖物も
てあまあや何あてもきんじきぬあま山の上かんと佛
白小袖物もてあま山つあまの上かんとあり按あま
山と云地名をとりて各付しや又ハ地合のよかりてあまを
あててあま山と云今世ハ丈山むぎあま山ハ丈と云あり
ハ丈嶋よりあま品も他國より織るるを云也あま山と云
ハ天文の比り終結り進て尋ねる所なり

一 両ら世あますぢうりてこれあまぢら乃て御對面し記
言あられあハ籠ハ八十九進をあまぢらうりてあまあハ籠ハ
三十よりすまはきぬ物まていさうせあますぢうりて
てあまあまを地色何あてハ紅乃籠を織るるを云とあま
れあまあまハ地色何あてハ紅の籠を横あてせまおくり
海せうりてハ重あまあまハ地色何あてハ紅の横あま計
織るるを云りてこれあまあまを一各られあますぢうりて
あまのあま

女居内し記云女
子推子ヲ色ニ
テ看ル俗一也

一 地赤地黒地白地惟子と車簾中旧記云六月一日あま
あまあまあまあまあま又七月一日何あまあま

あてともあんぢしうあてともいふこと云々何うきあてとも
 云ハ地赤紅のうらひふらゆく挿振小紋あてを深くを
 云也らうきあてともハ地黒のうたひに白く挿振小紋
 あてを深くを深くを深くを深くを深くを深くを深くを
 地緋のうらひふらゆく挿振小紋あてを深くを深くを云也
 一 小袖惟子あての事を記せし中よりいさうりとも云事あり
 ういさうりともハ肩よりすそ迄事あり

一 寸布多々の事貞孝朝臣相傳条云云をわくんとすハぬ
 里ぬきあてともいさうりともい裏をつけはまやうともい
 に入らすともあてともいさうりとも又まらちりぬきあてともいさうりとも

黒女房衣懐次
 才ま柳色トハ堅
 をもえさよ傑て
 横たのあまの袋
 ナリ

あてともぬいさをあてともいさうりともいさうりともいさうりとも
 あてともぬいさをあてともいさうりともいさうりともいさうりとも
 一 ぬきあてともいさうりともいさうりともいさうりともいさうりとも
 月上原殿聞書云ぬきあてともいさうりともいさうりともいさうりとも
 青く白く云々此ぬきあてともいさうりともいさうりともいさうりとも
 とも女房跡あてともいさうりともいさうりともいさうりともいさうりとも
 き白く混すべし

前ハ肩ノ通ニ
 モノアルヲ云
 ナリ

一段の物の事練着あてともいさうりともいさうりともいさうりとも
 ばよ織らう地黒いさうりともいさうりともいさうりともいさうりとも

黒くともいさうりともいさうりともいさうりともいさうりとも
 別玉お林ともいさうりともいさうりともいさうりともいさうりとも
 女房故実

々云々人々もいふはたんの方上々あり女房内記云十二月
何れもあろうとあるあの人のはら裏と表のらくくはらけい

目結鹿子事一物子即す伊勢貞順豹文書二品は名えら

目結ラレケクッ
メタルヲバシゲ
メユヒト云ナリ

目結 俗ニ鹿ノ子ト云テ如クナルヲナラヘテ染タル也惣体ニ染ル之今ノ行矣アラレノ如シ 鹿子 俗ニ鹿ノ子ト云テ如クナルヲナラヘテ染タル也惣体ニ染ル之今ノ行矣アラレノ如シ

共ニク、ニ染ありとも 城居別あり

朽葉色捨皮色は事貞順女房衣装次方云朽葉色と

堅を赤く染て横を黄と染ぐる糸も織り捨皮色と

堅は浅黄と染て横を赤糸も織り多るなり

一附帯の事貞順清取渡次方云附帯云女房内記云今

日々女房上下帷子を色々に染るる附帯也是ノ

事ハ洞中乃以沙汰也俗地白帷子とけ帯と云也共

はニハカイト
トノ帯地クロ
ニスニヌヒア
等ヲウケテト
是物イツノ比
リ記リタル歟

天文永録元龜比の書也さげ帯は名ハ附帯と云也

一茶屋染之事若此あり子摸拵あり多くと我々も冬

とありぬ任吉は岩の姫松幾世経ぬんと云ふ歌繪

あせば我々も冬とありぬと云字を繼て任吉の社の

てを画き深窓の姫松と云字を繼て松を画き染るる

冬一茶屋過とるるにうねを画き染るるあり

ともよ何れもやうあり

一染小袖重陽は用事者も記す如く室町殿の比花色條

小袖を必用と云起も詳ありすれと酌并記一本は

藍染小袖ハ九月九日トアリ蜷川記染小袖の時分の事

清閑寺大納言
慶卿説云九月九
日ハ花色ノ小
袖ヲ着スヲ染物
トナスヨシ是陽
ノ色ハ青キヲタ

九月九日の出仕は必多也それより何れも是れ素袍
下も是れ也云々室町殿末の比は花色小袖用はれ欲

一たすきの事源氏薄雲巻云々たのめきみのすき羽
ふまへるむ袖つきざうらうらききひてなえぬる三和
秘抄云むうーハおきかきく小袖をぶきすたすきとり
物をきたる也猶秘伝あり枕草子うらうらき物の篇云
多すきくけまむらうらうらきあうらうらけあ
まろふらうらうら春曙抄云是も児ナカはああうらうら
藻塩草十八巻云々すき旧例男女ともはナカ袴の時を
小袖をぶきすナカ袴をぶ用也一条院の比はうらうらきより始

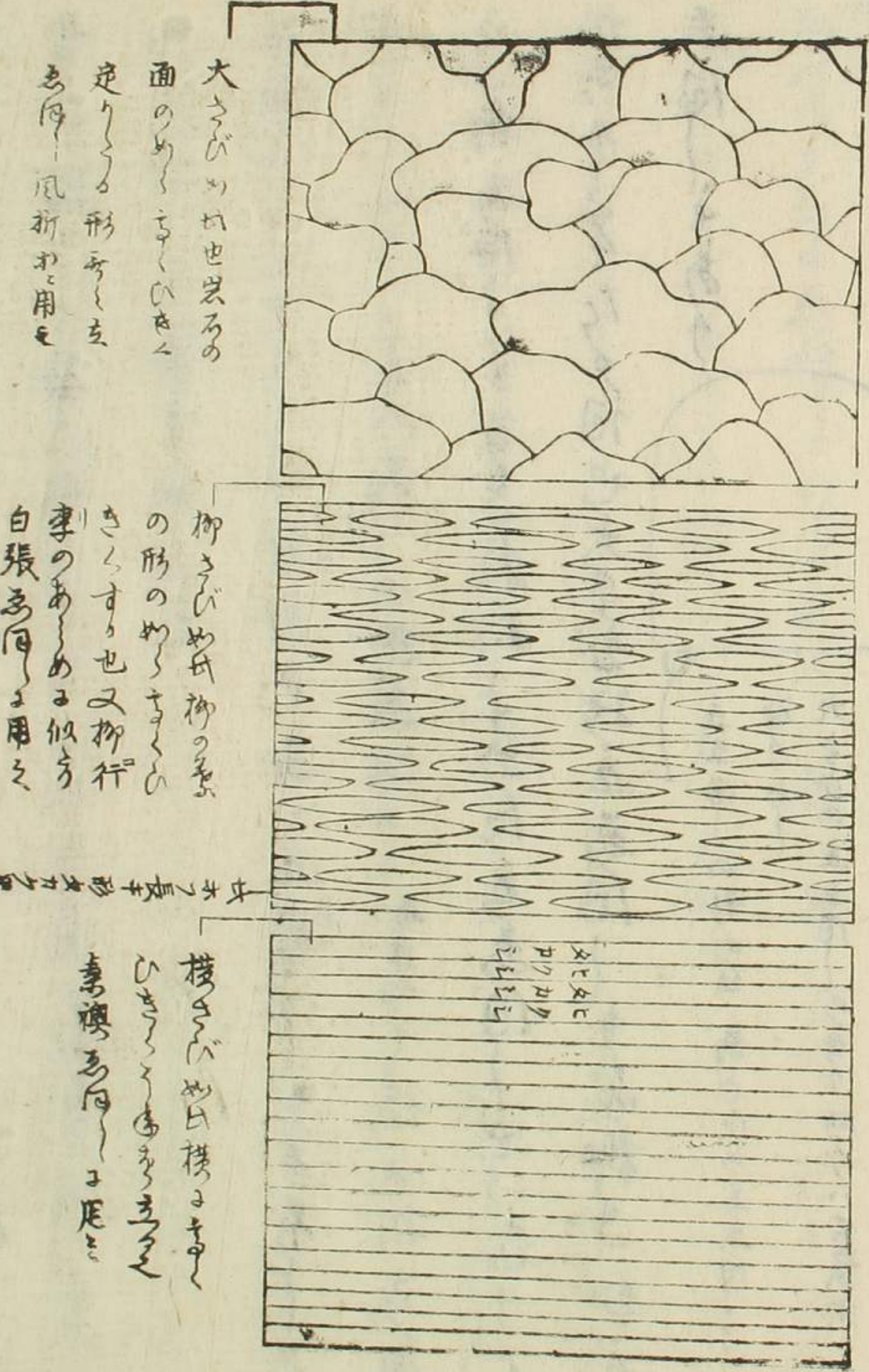
條々聞書曰又か
らうさの拾ハ所
集刺みハハハハ
ハハハハハハハハ
ハハハハハハハハ
ハハハハハハハハ
ハハハハハハハハ
ハハハハハハハハ
ハハハハハハハハ
ハハハハハハハハ
ハハハハハハハハ

了四小袖を穿一着へるありたすき白陣絲乃後少あり
裏白平絹あり之幅惣縁のしろは三寸帖大略ゆ打
治承四年東宮安德山忌袴の時忌御の極存身はか
ききよりうらうらありて用は禮うら共忌御ハありて
一紫裏はの室町家此制に定めも所見ありはれとも誰
々も是れ用はありき事ありてや慶永七寅年四月十五日武
家諸君度云衣服乃割公卿以上ハ白綾五位以上白小袖
用ゆ事秘傳す紫袷紫裏練無紋等の小袖を用ゆ
を懸らす煙さ者古の衣服ハ各々分限を論へるす云
一わけの小袖乃事女房衣装次云わけの小袖の事是六年

本願令ニ礼服ノ
 条ニハ冠トアリ
 朝服ノ条ニハ頭
 中トアリ此頭巾
 二羅ト漫トノ品
 アリ羅ハ貴ク漫
 ハ賤シ此頭巾ハ
 後代ノエボウシ
 ナルヘシ
 爲ノ始ハ花園
 左大臣有仁公ヨ
 リ始ル徳世修物
 語ニ見タリ
 さびあ布ト上古
 ノ頭巾ニ羅ト漫
 トノ品アリエボ
 ウシヲ紙ニテ堅
 ク作ルニ至テサ
 ビヲ作テ其品ヲ
 ワケタルナルベ
 シ

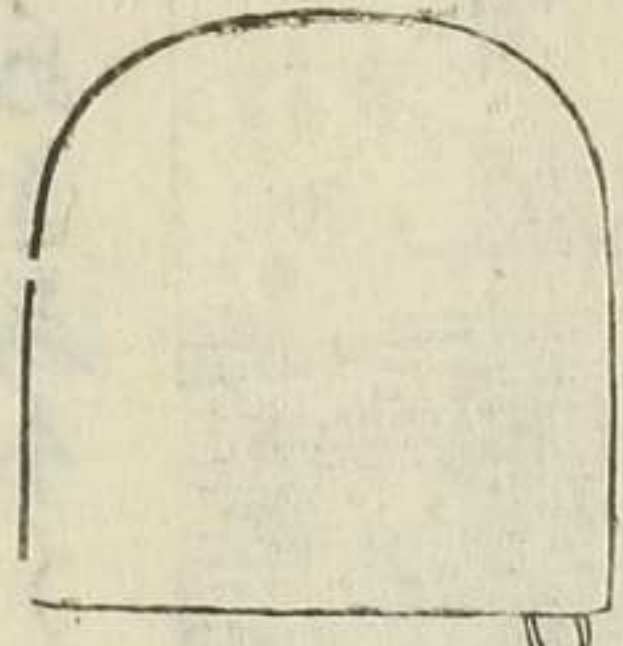
一 爲ノ始ハ花園左大臣有仁公ヨリ始ル徳世修物語ニ見タリ
 一 爲ノ始ハ花園左大臣有仁公ヨリ始ル徳世修物語ニ見タリ
 横さび柳さびがあどきと何の古くあかぬやうな作り
 時代は爲ノ始ハ花園左大臣有仁公ヨリ始ル徳世修物語ニ見タリ
 今の世うさぬ爲ノ始ハ花園左大臣有仁公ヨリ始ル徳世修物語ニ見タリ
 多を有りて紙をそとくしに刺しあててちかちかしたびを
 する也徳世修物語ニ見タリ爲ノ始ハ花園左大臣有仁公ヨリ始ル徳世修物語ニ見タリ
 ハ後さびめきあかぬと云物出来たさびもあかぬ形め
 ろうとぬりて光りほる地へさびめきとくさるあかぬと云
 ぶささびに刺してつぎさびを作つてさびと云
 此にあらぬさびと云さびと云さびと云さびと云さびと云

爲ノ始ハ花園左大臣有仁公ヨリ始ル徳世修物語ニ見タリ



一 縁塗ヘリヌリと云ハ、ぬりを付すぬりとする也。一 金ぬりカネヌリと云
 事を、燦シラと云ハ、ぬりとする也。今、今、今、家方此、立、何、も、風
 折、何、も、ぬり也。

一 立、何、も、ぬり、の、本、折、也、ハ、立、何、も、ぬり、を、多、す、と
 ぬり、い、い、い、い、い、い、の、折、何、も、ぬり、を、多、す、後、は、折、何、も、ぬり、
 を、折、何、も、ぬり、を、多、す、ぬり、を、多、す、立、何、も、ぬり、と、い、い、い、い、
 かし、を、多、す、た、何、也、大、き、い、折、何、も、ぬり、も、折、何、も、ぬり、と、立、
 何、も、ぬり、も、ぬり、



立、何、も、ぬり、の、形、ハ、折、何、も、ぬり、の、立、何、も、ぬり、
 大、き、い、の、立、何、も、ぬり、の、形、ハ、折、何、も、ぬり、
 大、き、い、の、立、何、も、ぬり、の、形、ハ、折、何、も、ぬり、

右、の、立、何、も、ぬり、を、多、す、ぬり、を、多、す、前、の、方、を、折、何、も、ぬり、
 ぬり、ある、立、何、も、ぬり、の、形、也、今、今、今、今、今、今、今、今、
 折、何、も、ぬり、を、多、す、ぬり、を、多、す、ぬり、を、多、す、ぬり、

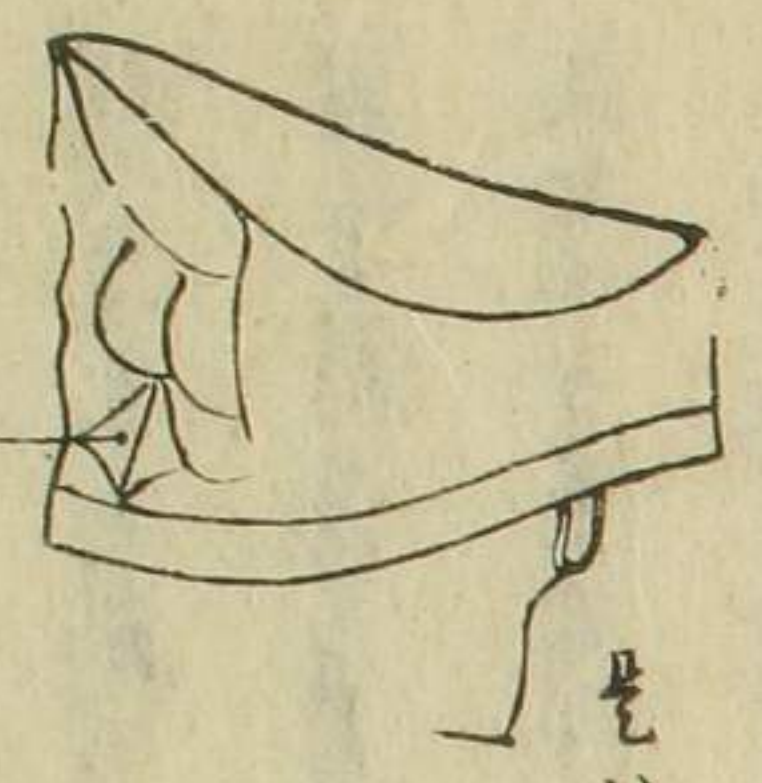
一 風、折、何、も、ぬり、と、云、ハ、右、の、立、何、も、ぬり、を、多、す、ぬり、を、多、す、
 ぬり、折、何、も、ぬり、も、折、何、も、ぬり、也、風、折、何、も、ぬり、も、折、何、も、ぬり、
 折、何、も、ぬり、も、折、何、も、ぬり、も、折、何、も、ぬり、も、折、何、も、ぬり、
 方、折、何、も、ぬり、も、折、何、も、ぬり、も、折、何、も、ぬり、も、折、何、も、ぬり、
 へ、折、何、も、ぬり、も、折、何、も、ぬり、も、折、何、も、ぬり、も、折、何、も、ぬり、
 を、折、何、も、ぬり、も、折、何、も、ぬり、も、折、何、も、ぬり、も、折、何、も、ぬり、
 方、折、何、も、ぬり、も、折、何、も、ぬり、も、折、何、も、ぬり、も、折、何、も、ぬり、

風、折、の、名、ハ、
 レ、ト、云、平、私、ノ、字、
 也、ス、ベ、テ、エ、ホ、レ、
 フ、左、カ、右、ヘ、折、フ、
 セ、タ、ル、ヲ、ヒ、レ、ト、
 エ、モ、名、也、ヒ、レ、ト、
 ト、ハ、ヒ、ラ、メ、ク、矣、
 ナ、リ、

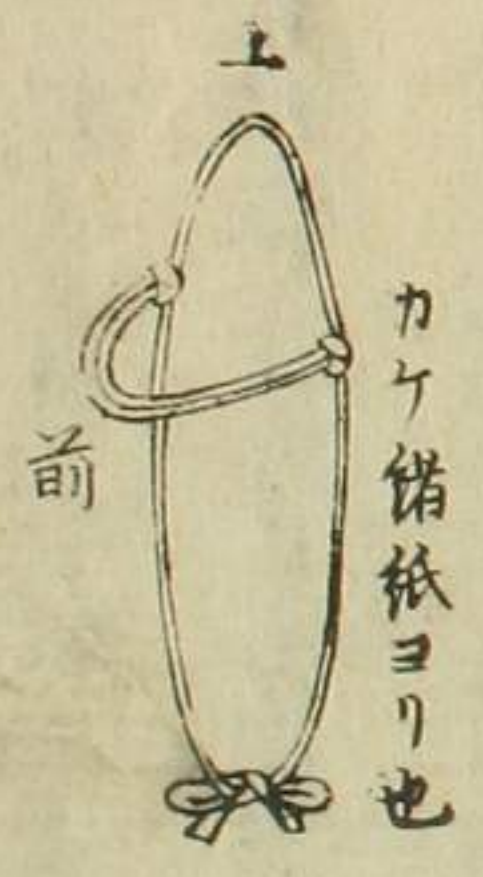
貞丈按西三條裝束
 東按二右眉五眉
 諸眉小諸眉ノ名
 見タリ後叔ハ道
 通院実隆公ノ祚
 也又故実清諱ニ
 義頼小諸額右レ上
 リノ各見夕リ後
 叔ハ三光院実澄
 公ノ作也道通院
 ハ三光院ノ祖父
 也時代速カラズ
 然レハ眉ト云ハ
 ト云上リト云ハ
 通稱ニテ新古ハ
 差別アルハカラ

一今時の立あがりも風折あがりも眉の方を押し
 みこもあは左眉右眉諸眉片眉小諸眉と云品あり是れ
 あがり此眉の中ごうりごうりごうり下はみこも押し
 りあがりきをもちと云右り左り一方は出り出るは片眉
 也両方は何れも諸眉也片眉此内より左の方のあがり左
 眉也右り方にあがり右眉也諸眉の内よりあがり大り
 あがりも諸眉と云小りあがりあがり小諸眉と云也何眉
 と云りも近代の初より非す又もろおこみ片じごうり
 云又ハ左より右あがり諸より片よりあがりごうり
 野々宮宰相定基卿の説ありこれごうりも皆あがりも

こそらぬりごうりごうり出まらば事あり
 何れもあがりごうりあがり時代よりあがりごうり
 装束の衣紋を作ごうりあがりごうり比よりあがり
 あがりごうりあがり衣紋作ごうり後多羽院乃近代の
 比よりあがりごうりあがり



此はあがり眉をわさあがり左なり片方のみあり



カケ諸紙ヨリ也

甲州高坂彈正傳
未モシエホニ秘
常ノ立馬帽子ノ
如クニテ地ハ精
勢ヘリハ馬皮ノ
由ヘリノ裏中ヨ
リハ千マキ引通
レエホレノ後ニ
ナ結ト云ヘリ

ある者が一のある中不存の品、今も昔は如くやうに作
るがよもみあはしき也古代ハ皆やうに成及あり也格よりく
ゆりくくあり物おきてありやうに

一梨子打ナシウキあはしき梨子の字ハ字を假り用ひての返り

木の実の梨子の後ハあはしき取事也あはしきあや

一打の畧語也あやハあはしきあはしきあはしきあはしき

やうに作るあはしきあはしきあはしきあはしきあはしき

年十二月廿五日東宮御元服昔人衣服打梨今人装束如木

又明月記ニ正治二年八月十六日中累騎馬候供奉布衣打梨子

公敏卿記文保二年二月廿一日ノ記此直衣去年秋雨中初着給之間如法打

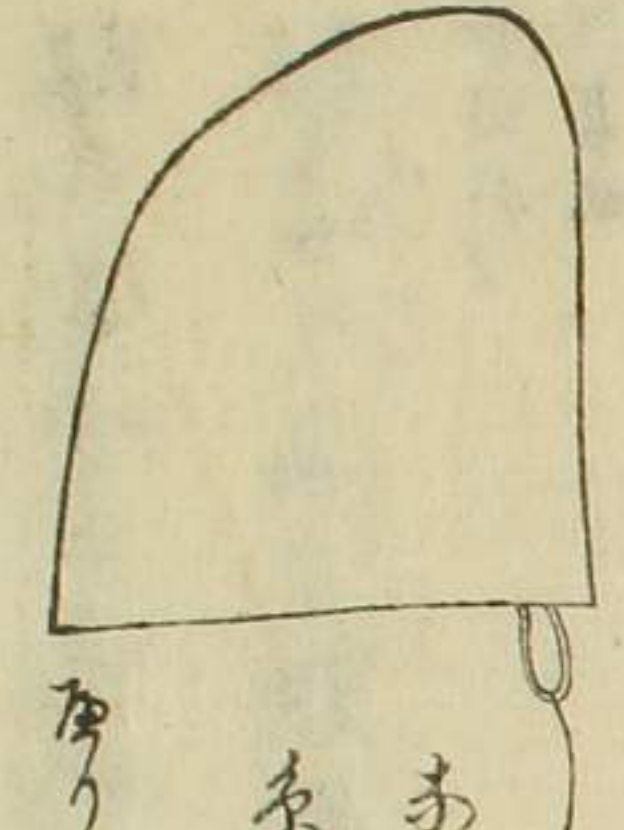
梨子又東鑑引長三年癸亥四月十四日記曰ニ所御参詣中累不諧垂翅之

間打梨定有憚歎云右打梨トあるハいつてもあはしき

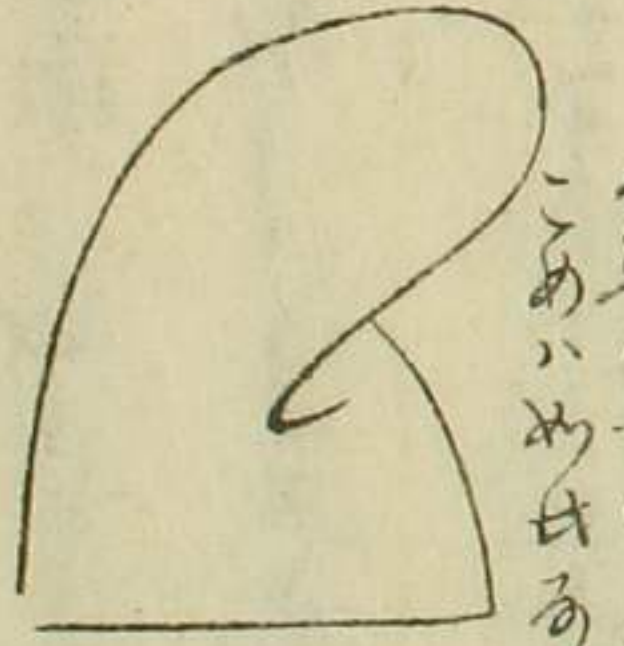
や一の畧語もて装束のあはしきあはしきあはしきあはしき

是と同義也あはしきあはしきあはしきあはしきあはしき

後もも裏ハあはしきを黒漆もてぬりて縫ひて作る也



一竹ハリ本トリニサス
あはしきあはしきの形也
あはしきぬい作る也



あはしきあはしきの形也
あはしきぬい作る也

右の古法をあはしきぬ人近年うすきあはしき一革ニあはしき
を作るてあはしきを金箔もてぬりて縫ひて作る也

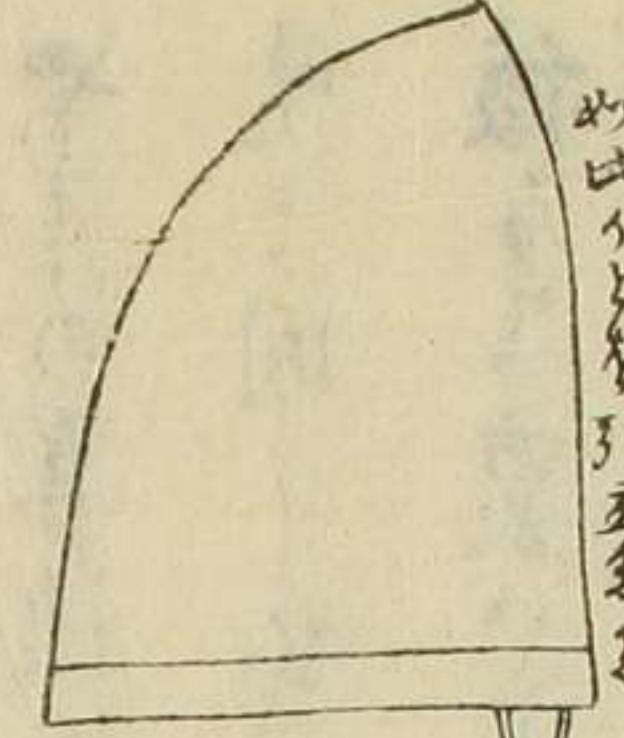
公家古実ヲ字フ
 人ハ一概ニ武家
 ノ書ニアル事ヲ
 ハイヤレメ用ガ
 ルハヒカ事也武
 家ノ書也氏古書
 フバ用ベシ公家
 ニタエタル事
 家ノ書ニアル事
 アリ引タテエホ
 シ武家ノ古書ニ
 アリ
 隨兵日記ニ云文
 明十八年小笠原
 元長記也ヘリ又
 リハ出陣ノ時大
 將又ハハタサレ
 トドキベレハチ
 マキラスベキ也
 云レ此ヘリ又リ
 ハ引立エホレ也
 スベテヘリヲ自
 テヌリタルハ何
 工ボレニテモヘ
 リ又リ也然ルニ
 武家ニテ引立エ

ト云ハ曹ノ下ニ
 着ルエトシハ十
 ナレ折ニハヘリ
 ナレ引立ニハヘ
 ラレニヘナ
 折ヘリナキニ
 引レテ引立ヲハ
 ヘリヌリト云又
 ヘントヌハヘリ
 ト云河ノ轉ミタ
 ルナリ
 公家ニ衛府ノ長
 ノ着ルモ此エホ
 レナリ今ハハ
 ライニ云平社ノ
 云々トナリ

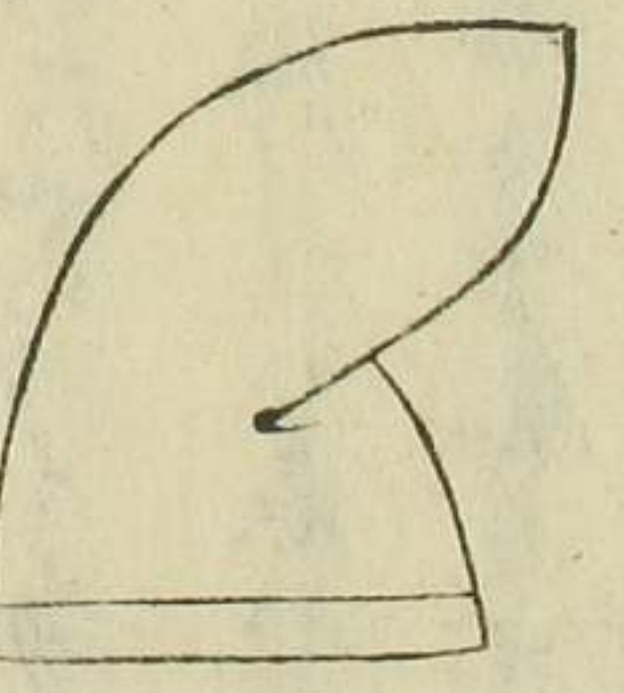
也ト云人あり一向無実あき妄作あり笑ふべし

一引立為月ハ紙まきうすく作りさびハ大きむあや厚り
 ぬりもすや也形ハ存おあ一打為月ハのうしろのうら
 引くもあや物也さねバ引くもあや一と云也
 此傳兵異雜記
 ニアリ京都時

軍時代ノ
 古書也



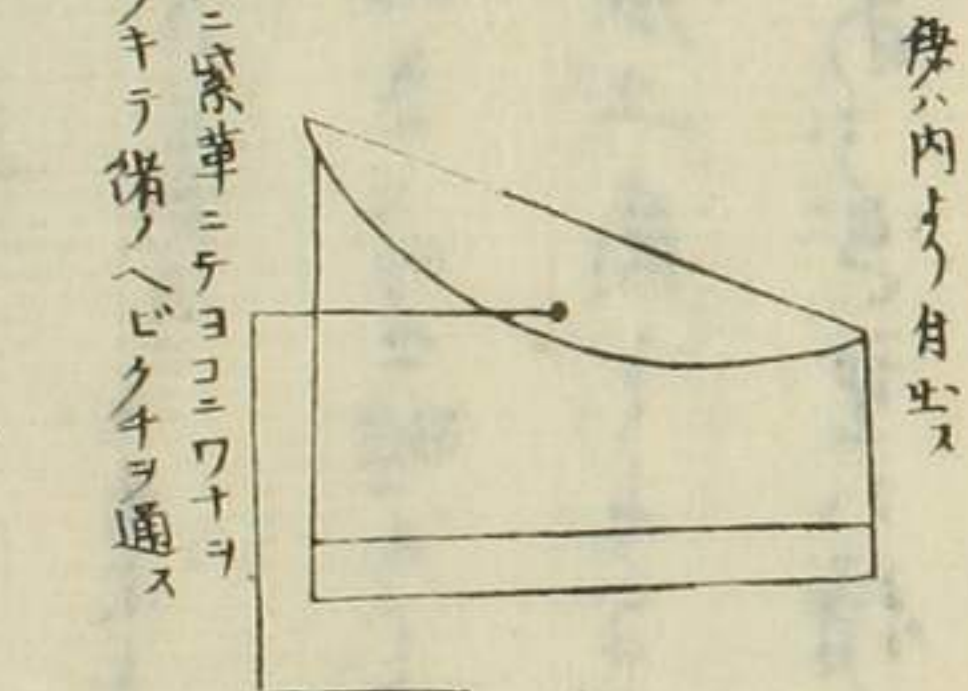
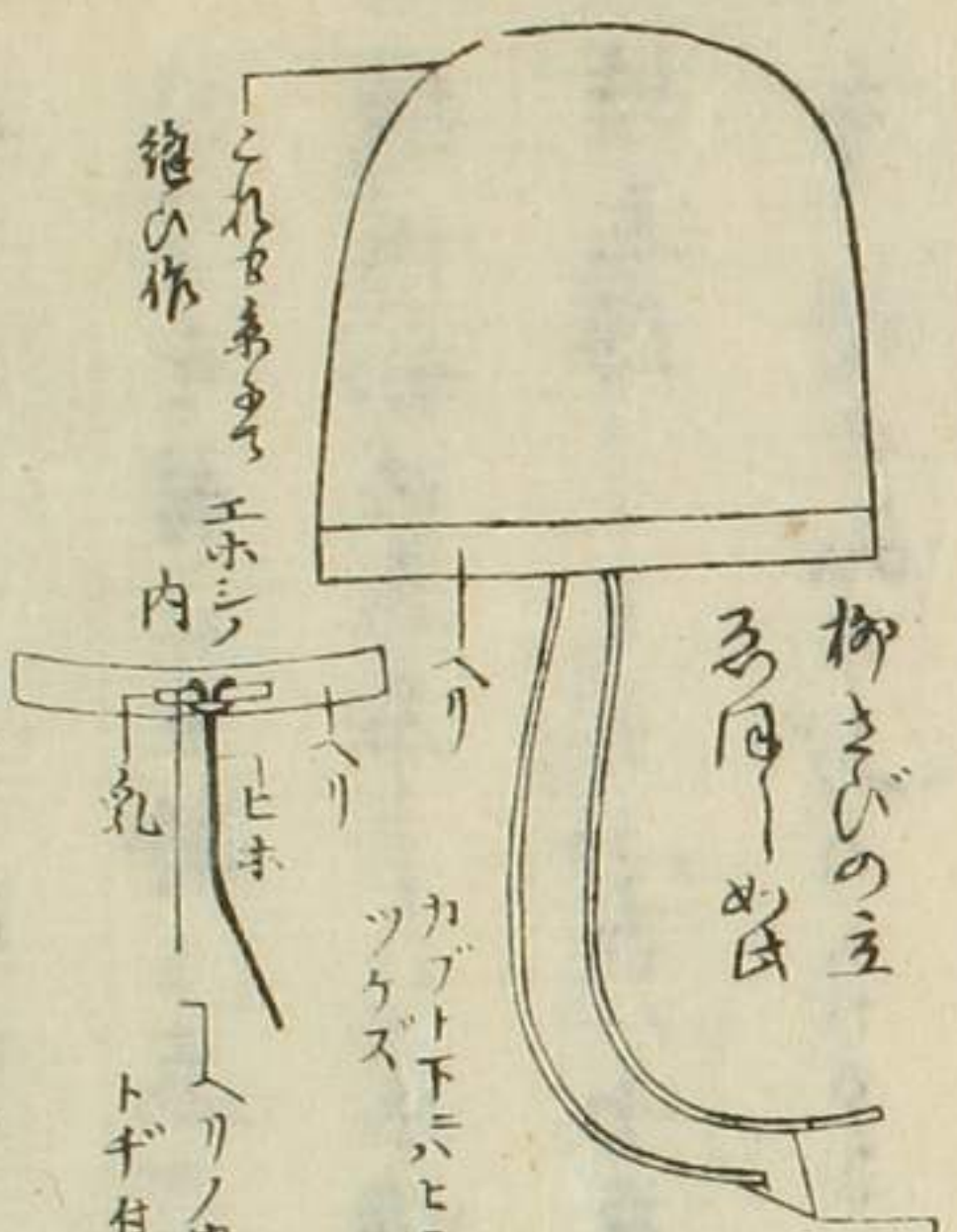
竹バリ本ドリニサス
 引立為月ハ形
 ぬりあり
 厚くぬり也
 是も糸あや紐也



武家ニテヘリヌリト云ハ引立エホレノ事也
 うらうらとくしんを
 物しぬもぬりも
 也
 紙すくやうく
 作らる

源平盛衰記卷三十三に從ノ直垂ニ同モノ鏡引立エホレヲ著
 一柳さびの折為月ハ柳さびの立為月ハを上を折り
 折るもあやうらうら竹訂をあ一と為ぬ也はあ不

も紙まきうすくやうらうら作る也柳さびハ美人のうらる物
 あや下綫の人用之常あも白張あや傘持者あど柳
 さびの立為月ハを用也軍陣ハ平士折て用之



柳さびの立
 為月ハ
 竹バリ本ドリニサス
 引立為月ハ形
 ぬりあり
 厚くぬり也
 是も糸あや紐也
 うらうらとくしんを
 物しぬもぬりも
 也
 紙すくやうく
 作らる

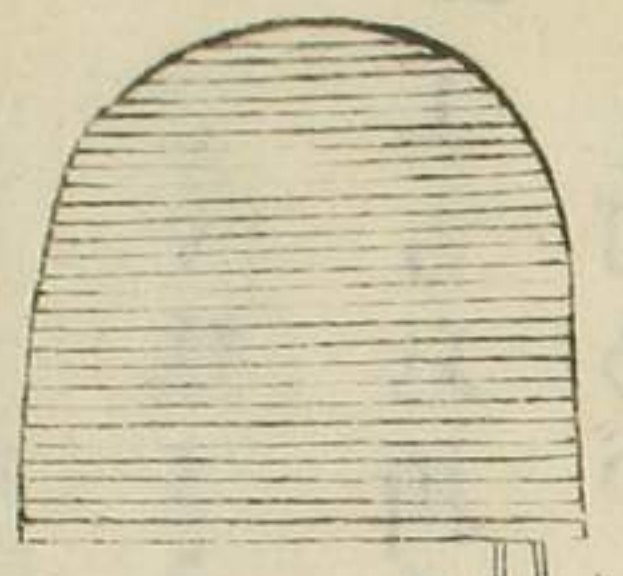
右二品ハ軍陣の射うらうら作るもあや一也さちま
 きをうらうら上うらうら也又為月ハのうらに射の方ハ
 ばらまきの真中をあや耳の造はぬらあどの方を黒き

古ハ紗帽ニ係ス
 リテ作ルユヘエ
 オシヤハラカ也
 帯ニキルユヘモ
 メレハヨル也
 鳥ハ院衣ト云
 一ヲ始メタマヒ
 シヨ末エホレヲ
 依ニテ張ヌキニ
 シテモメタルハ
 ノ形ヲ本形ニテ
 出レテ是ヲ折
 ビト名付クリ木
 形ニテ折テパイ
 ヲヤウニモサビ
 形出未ルユヘ
 折ルノサビヲ
 折ルタルトリ

寺にてちどりうけはきつへしをちりまきをぬひ付ても
 也飛彈も惟久とあがきつる後三年合戦の餘りも武者
 入りてあがりぬげつる折をりきつるにあがりまじり
 まきを付つる折はあがきつるあり 此後出来あり

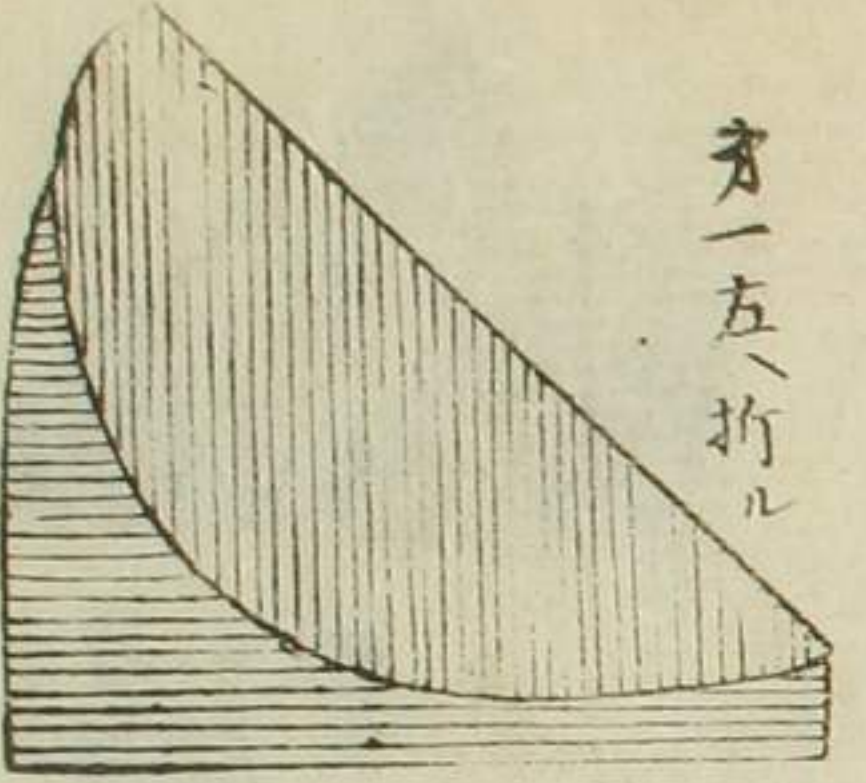
一横折のあがりハ素襖きつる時うがるあがり也今折ハ
 侍あがりとも古ハ士農工商とも常にうがるる平服
 あり侍のみうがるるあがり侍あがりといひごとし
 又近代ハ納豆あがりといひあがりといひ 今時田舎ノ寺
ヨリ櫻那ノ納
 豆ヲ送ルニ薄キ板ヲ三角ニ折曲テ紙ヲハリテ底ニシテフレニ
 納豆ヲ盛也其納豆ノ入物ニ似タル故納豆馬帽子ト云ナリ
 此横折のあがり
 一も古ハやううあがりともあがりとも折つる三角のあ

折きを作つる也まきつる印也まきつる印也まきつる印也
 内也今ハこもくぬりうめまきつる切をあつてつる物也
 まきつるあがりぬ物ハ折ありあがり

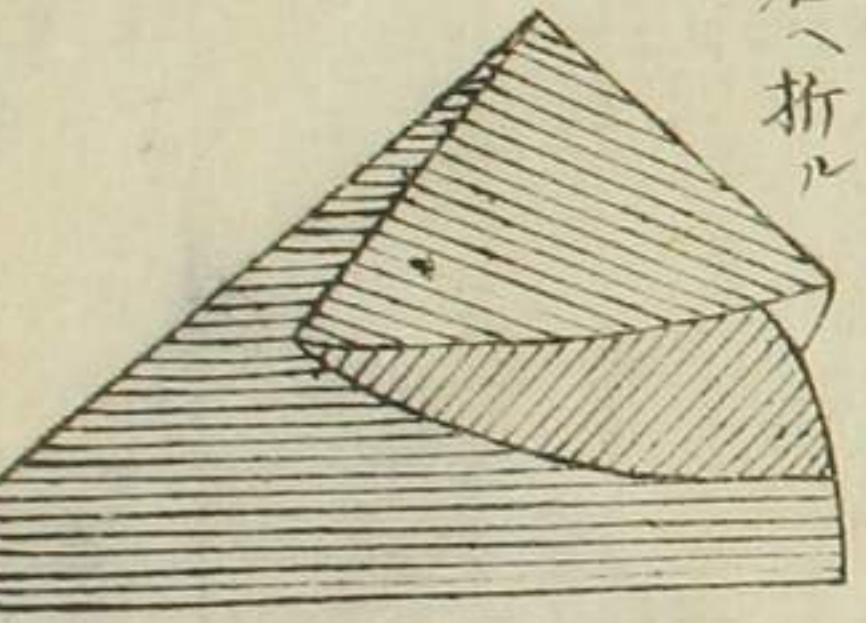


横折のあがり 平折

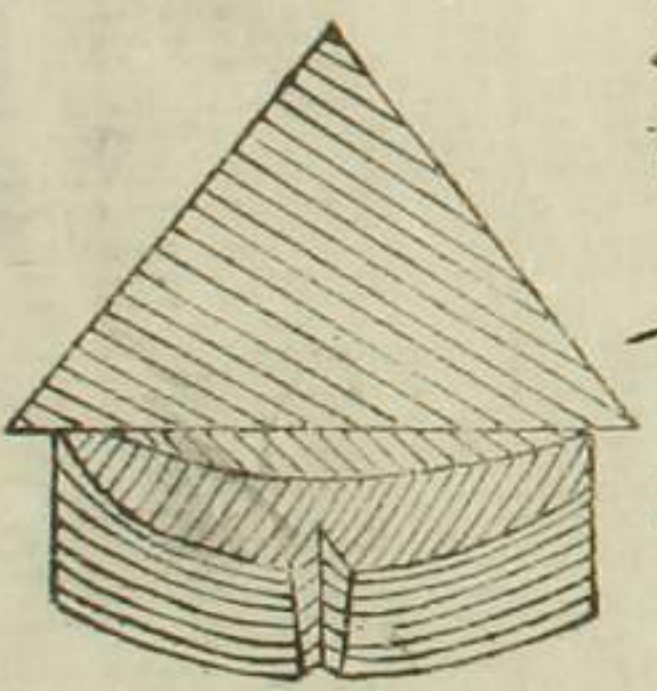
横折のあがりハ折也まきつる印也まきつる印也
 まきつるあがりハ折ありあがり 左のこもく



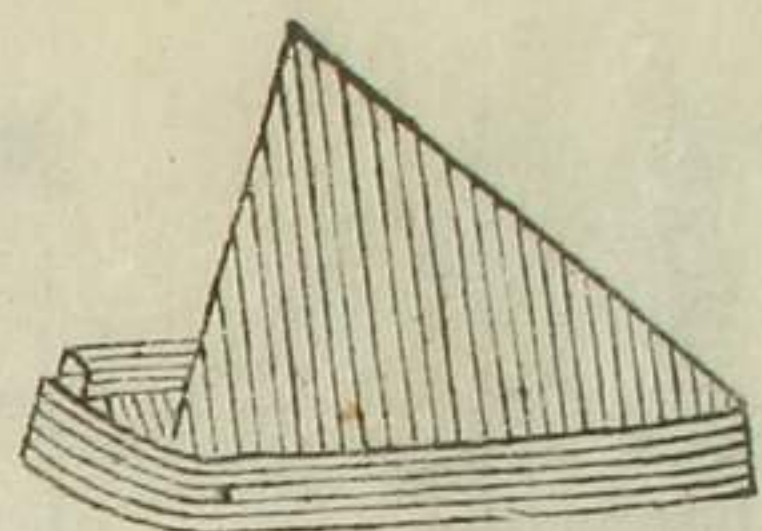
左一折



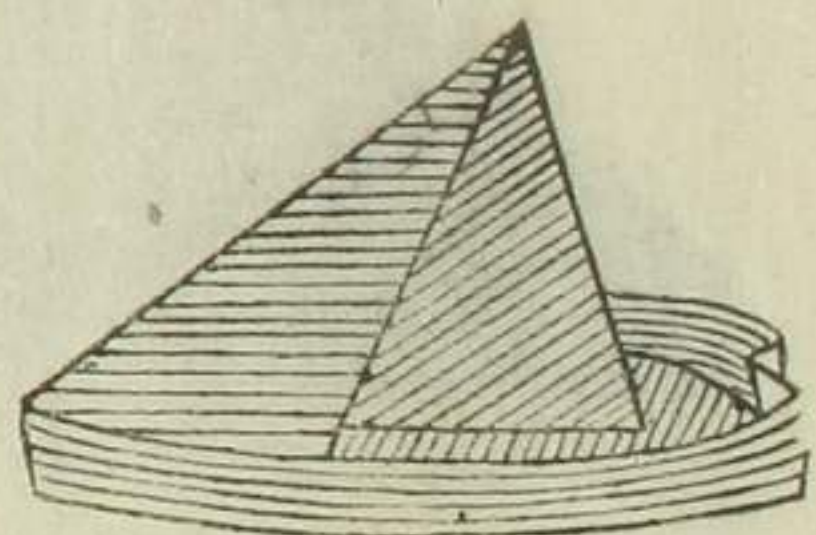
右二折



前三角折



形 方四左
ヨリ見ル



形 方五右
ヨリ見ル

右ハ芳極トモ京極楳トモニ折クニ也冨ノ一二の次方のよ
コク陰ノ又折クモあり

一上古折あがりハ右の上ハ右の上にすく居つゝありまゑが折
て折あがりハあつゝ也ハ右の上これぞまゑきも角ナリあつゝま
ありて袋の如く一も袋の如くありて袋の如くありて入を
つゝあり一あり

一折あがり一あよりふゆまゑが折てうが風口上ノ折ノ上あつ
まゑき也今ハうらぬりて三角ナリぬきを切をありてうらぬりし
ゆゑの上は風口とてあまをあげ又てうがうけを付る為
みまうけを曲てあがり一は打て也ハ筆の筆若くは若り
一あがりハ右の上のこゆひと云物も古々今替りあり古折小折の形也

此扇飛彈守惟久カエカキレ後三年合戦ノ繪

見タリ



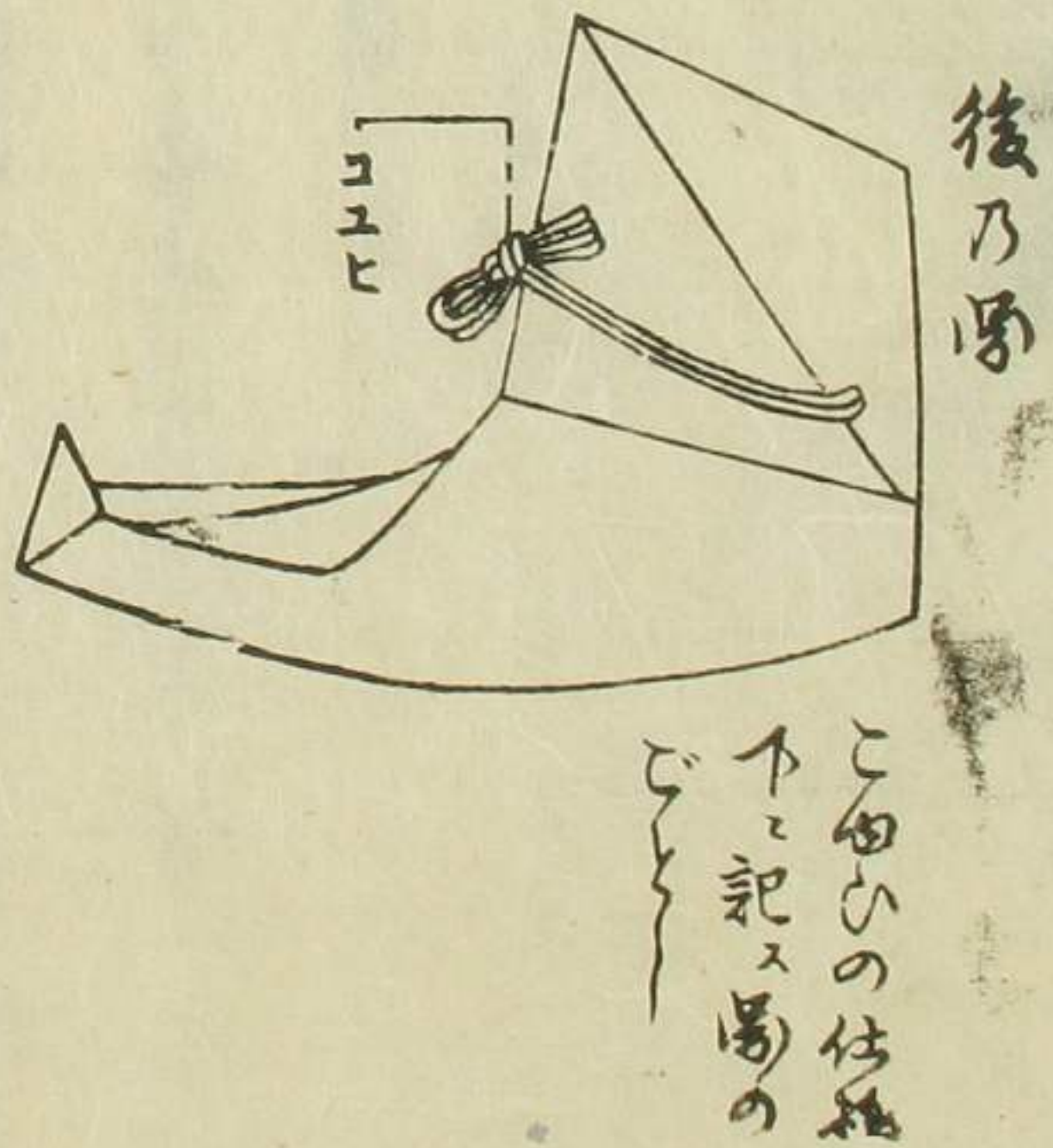
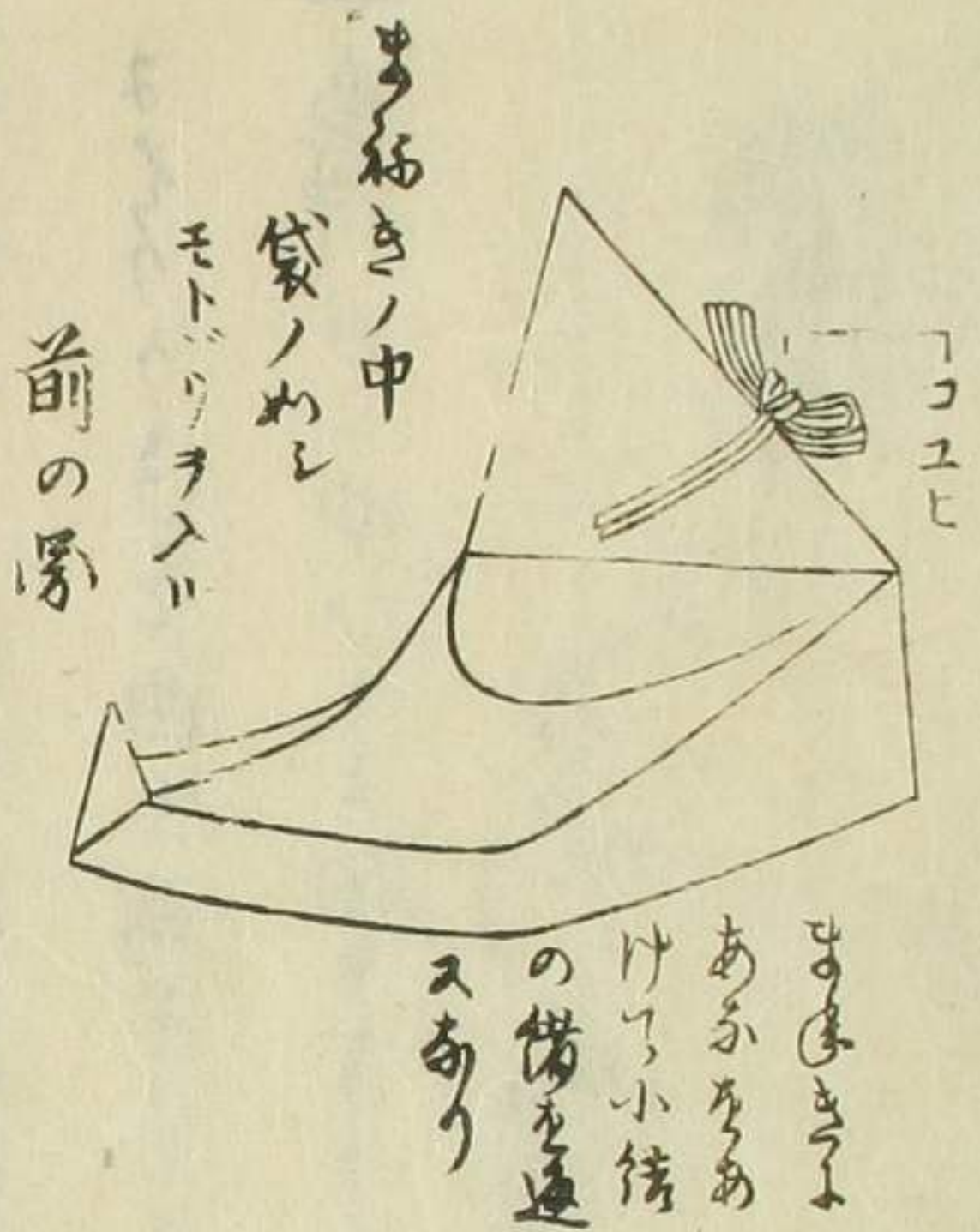
雜記三



見タリ

古代のしゆひの冑

このしゆひは緒二筋よりゆき



古の人の月代をさみふあはく髪をさむもいふをりていふは甲より上げて紐緒の半を
 けり長く巻くちやせん髪はゆひありあはく甲の半をさむの袋よりあはく甲より
 毛を入てしゆひよりあはく髪をさむもいふをりていふは甲より上げて紐緒をさむ
 もちぬひぬあり

一 小結コノヒは祖緒二筋を以て結也色は何色とも不定又紙捻カミは
 して小結する布衣記は足えたりせりカミ以て行儀を出す時乃
 事あり

一 式正の時にてはけしやうの業にこのしゆひ也されど小結
 する時にてはけしやうの業にこのしゆひ也されど小結
 せざるあり是古よりりの法あり

一 このしゆひの結は緒を尺計二筋よりしてしゆひなりよひ一
 ちすむ結ひしゆひの時ニしゆひの緒をさむもいふをりていふは甲より上げて紐緒の半を
 を細くするついでに包むひありて是も甲の肉よりして引出
 してしゆひさすよりびりていふは甲より上げて紐緒の半を

裏同し所ナリ工
ズトメ同色ノ
九祖長サ五寸許

佛子場始以分園
書比正割云々
下猪のめく
色ハ白赤青也祖
色ハ人々好む

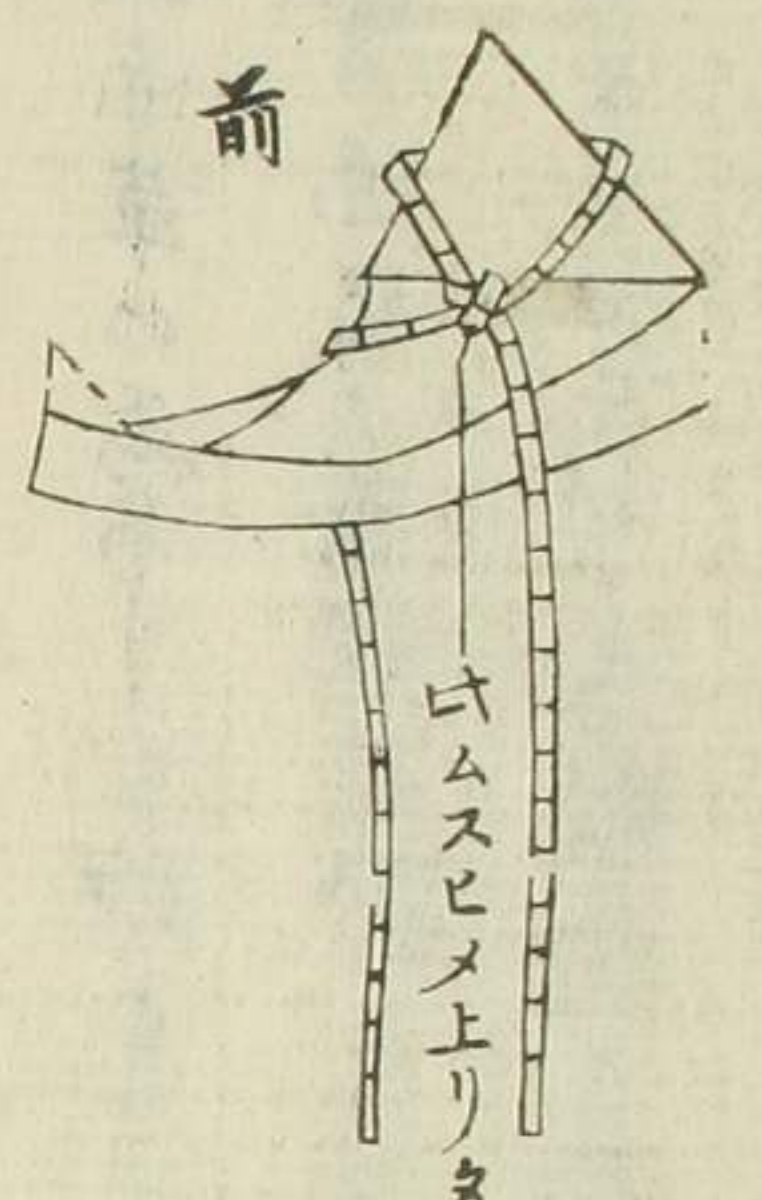
うすくくくく又云る尾を打くをなかなは又あまて打
くるを公昔故勢州貞陸とされゆい糸をなとひく馬
の尾をすすあせををらぐて用くる人もあり由道照
愚草伴勢六郎左衛門尉
貞順の記ナリ又曾我物語は一寸まきまの
あけくけをうけとあり又曾我物語はあやもん
あけくけをうけとありあけくけとん色くの色
をまき色ともみぬあやもん云々素襖の紋はあけ
くけとん色のあも同事也あやもんあけくけ
後三年合戦の繪はあけくけ左のあけくけあけくけ一寸まき
あけくけをまき色ともみぬあけくけあり



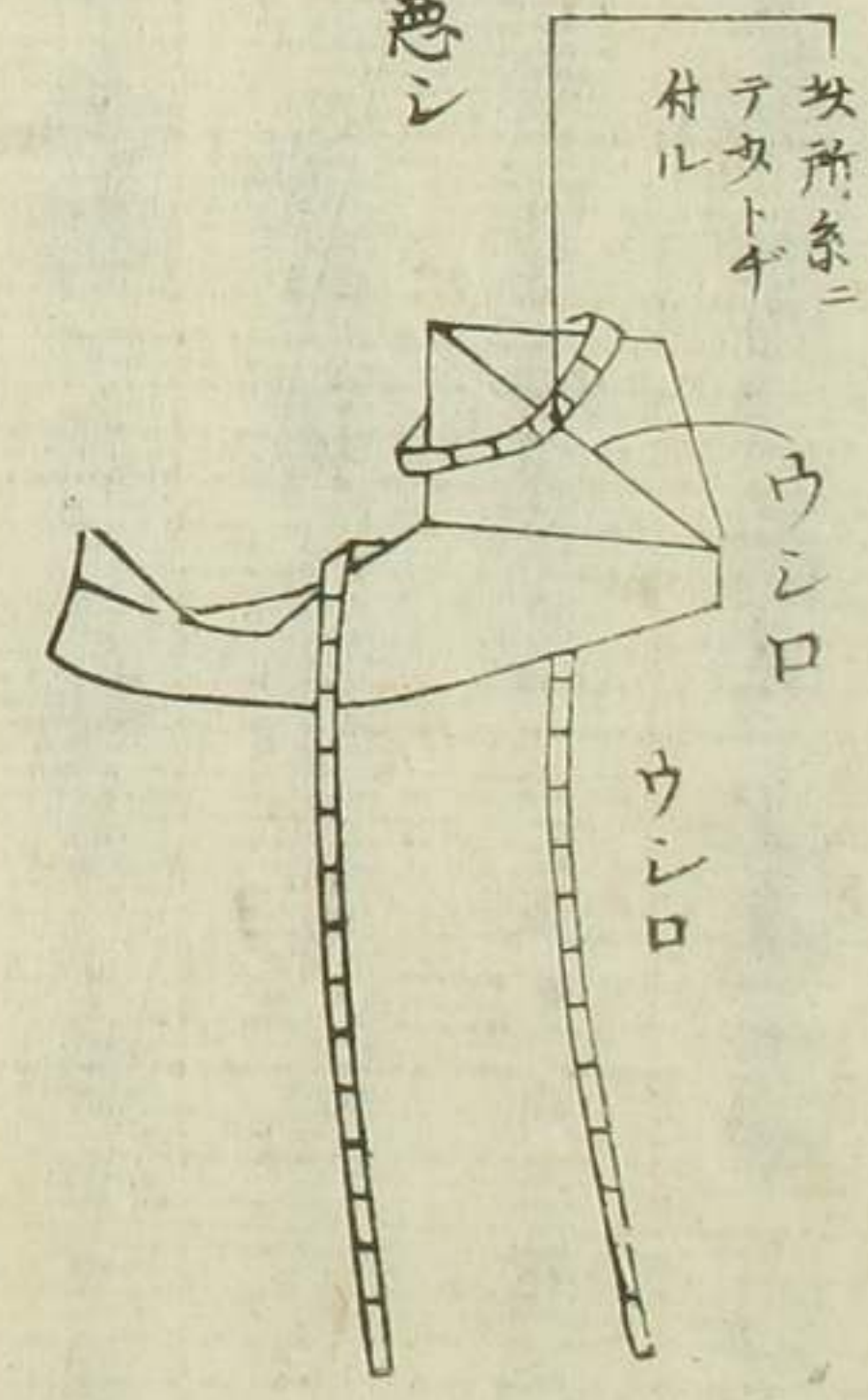
是あやもんあけくけ也後
三年合戦の繪はあけくけ白赤
乃之色組交あり

○又あけくけ革のあけくけあり東鑑卷之九可尋問
實否於囚人之旨被仰景時着白直垂折烏帽
子紫革烏帽子懸
○又赤革のあけくけあり布衣記ニ折烏帽子ニ紙ヨリ之小
結ニ赤皮ノ烏帽子懸とあり○源平盛衰記十九折上ボ
カケニカケ○義經記ニ折あけくけにあけくけあり
一てうけくけのうけあけくけ又古今留りあり上古のやうく
あけくけあけくけありあけくけあけくけあけくけあけくけ

てうけのけのま中をまあるは結てうけのね車を左右に引おろし
 ておろくぬあつ結也

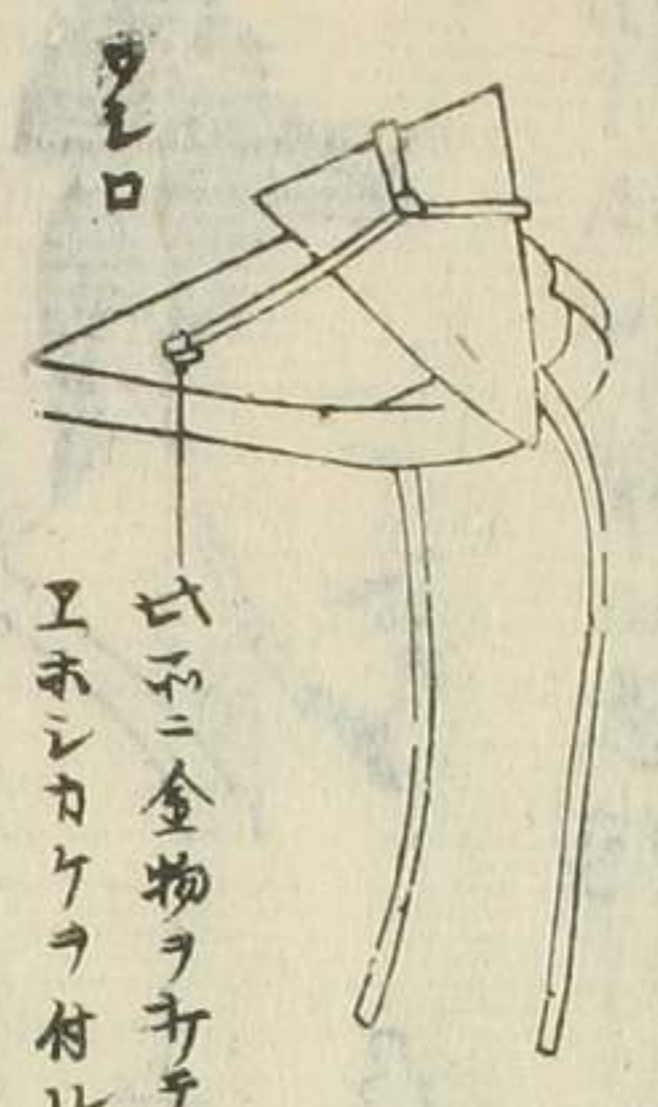


ハムスヒメ上リタルハ悪シ



ウシロ
ウシロ

近代のあやうけ懸結

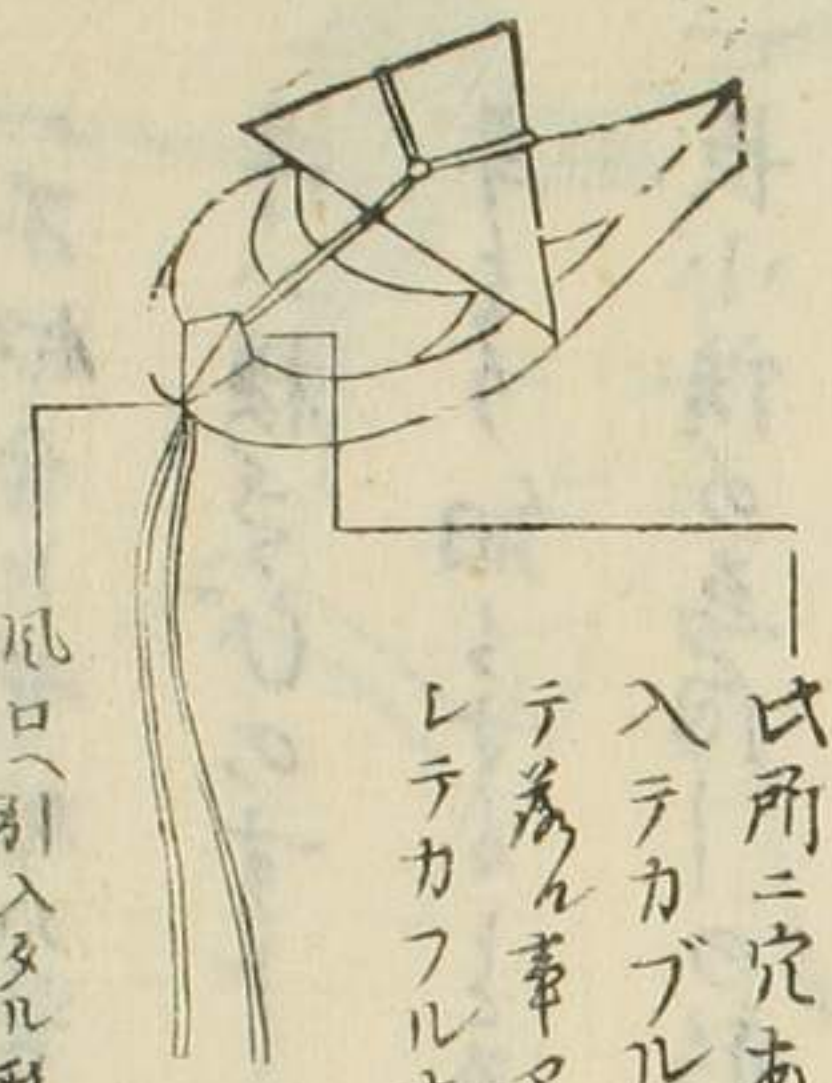


ハハニ金物ヲサテ
エホシカケヲ付ル



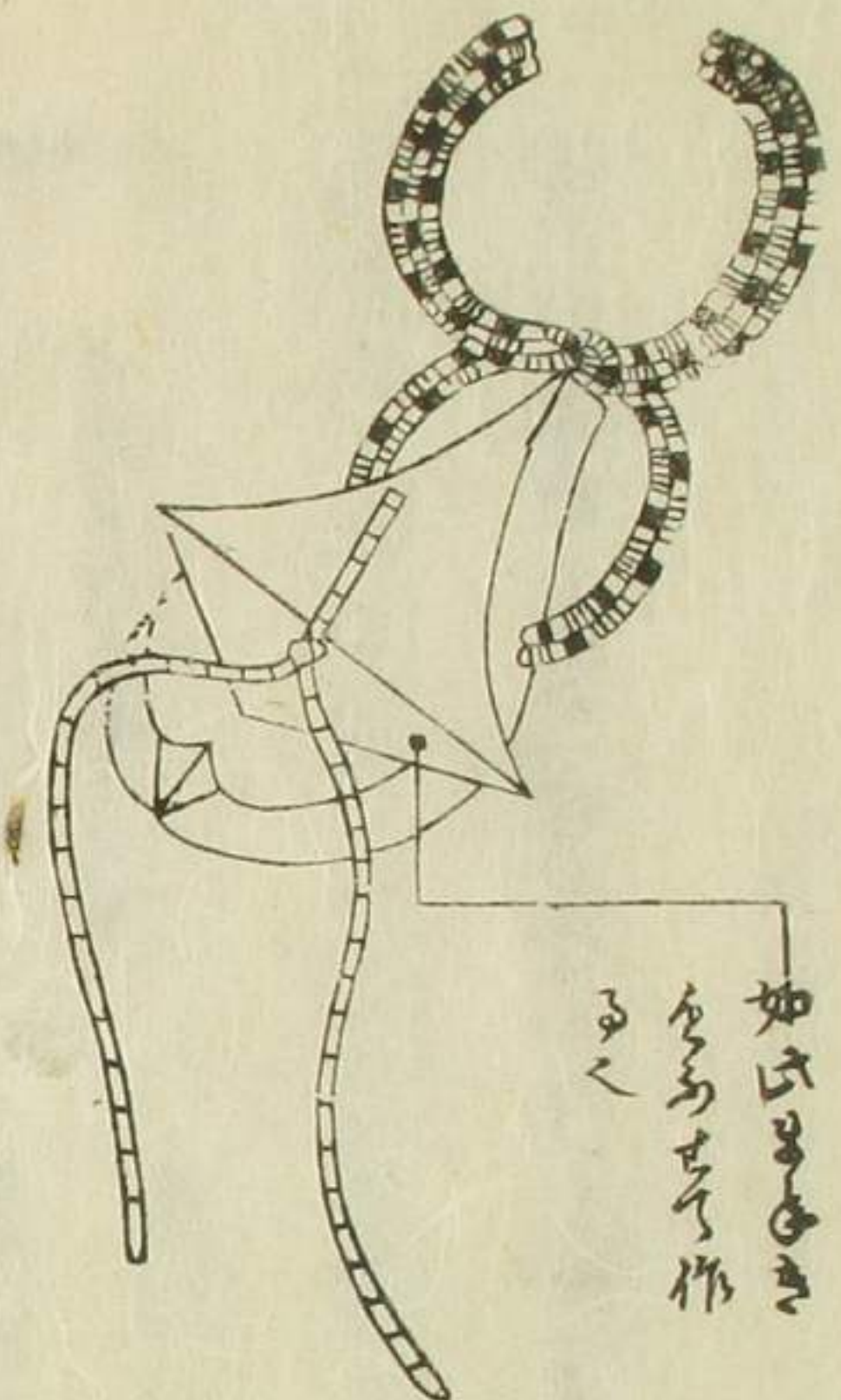
世あやうけを風口へ引入てうけの人あり甚誤也

以所ニ穴あり風口ト名付クハ穴ハエホシカケヲ利
 入テカブル事ハ法式ニ違ハテ其上エホシユルキ
 テ是ハ事アリ本式ニアラズ今世物シラヌ人ノ如ク
 レテカフルナリ笑フヘキヨク



風口へ引入タル形ハ甚悪シ

古書ニ組ゆひのるあやうけと云ハてうけのけをうけのるを云
 一長小ゆびのあやうけ長組輪とも云也少年此人のうけのる
 一何と云ハてうけのるを長組と云ハてうけのるを云也世長
 一ゆびの長の字を界して何ゆびのあやうけと云ハてうけのる
 一り也書札雜々閑書ニ云長組ゆびのあやうけの事十七八



如はまき
をあらた
る

當世乃長くぬいもの

ゆたあり

此小儀ハ依りたるを筆のちのりふま
わらむとくくくくくくくくくくく
まのあて巻さじ上、色くくくくくく
りのあてあやをくくくくくくく物也

一古へ打うけあはし〜と云ハ折あがり〜松小儀もて〜川くけも
す〜頭お〜入〜後の計をうりふ〜く〜云也
無禮の辨也室町殿の代ふ〜く〜折あがり〜
別書より〜

一今の世ま〜折あがり〜
〜公は多〜く〜古の〜く〜長縮水干
狩衣十徳〜ぬ袴禮あ〜古の〜も〜也古
書古画を見〜知〜古の〜も〜ぬ
事〜あ〜ぬを〜も〜
あり〜也
一あぬぬり〜物あり源平盛衰記卷卅九頼朝重
衡射面の条云兵衛佐淡塗ノ立烏帽子ニ白直垂シテ寝シテ
殿ニ出テ着座空色ノ扇ツカヒテト云此あぬぬりト云
柄あぶ〜ぬり〜あ〜
〜の色を赤黒

五ホレニスミヌ
リシブヲ引テ
アレフツレハ
事ノ時ニ服者ノ
スルヲナリ野
殿ノ奉書ニ見
ル

大曆卷廿二上
御素服ノ条云
鳥帽子者注云改
壯年人掠裳サバ
シ或尋常物通用
之
今川了俊大双依
ニ引目ノ大小人
ヨリタベキ様中
クハノ色ハハ
クハノ色ハハ
クハノ色ハハ
クハノ色ハハ
クハノ色ハハ

永仁六年八月五
日御幸都頼云殿
上人之中頭弁一
人細鳥帽子其外
三人平礼又云新
院脱履之後初御
幸嚴親法皇御在
所于時公卿廿一
人之中七人引之
鳥帽子十一人細
鳥帽子一人平礼

ありよきうー
はこへらま
あひかりな
てありうー
らのこ色ま
らのこ色ま
らのこ色ま
は雲をみる人
ありよきうー
つくりよきま

くうきあ殿の色まーくをいふあひくーあ殿色ぬりといふ
車を畧ーいふぬりといふあるー後三年合戦の給ま
あきあぶ色の細急ぼーをあつるまあつる武者一人給
がきくろ黒くーい走りくろあぼーの色あれどもく
ハのきあぶ色むくぬく色あどもありーいんえくろ

むらのこ色乃あがーあり職人ヲ袂合の歌ニ
其志あけぬあひのやせあまのむくのまあひありま
とあり判乃初ま左あまあまのくもむことくは流あきま
あひすあがーのむくあまの思ひよせまあやまむく
く色ハあひーいむむいあまのくもむくあまのきあひ

らのこ色ま

一 公方極室町時御鳥帽子の奉書常用抄云公方極御風

折ハ左へ折る平人ハ右へ折る額公折るハ左折る右を

高へする也平人ハ左へ折る也左へ折るハ是左折ト云物ナリ右へ折るハ是右折ト云物ナリ左折右折ノ奉書

二部ス右ヲ高クト云ハ右眉ナリ左ヲ高クト云ハ左眉也五眉右眉ノ奉書ニ前ニ記マ

一 細急ぼーハ武官のくろあぼー也くろあぼーのあまあ

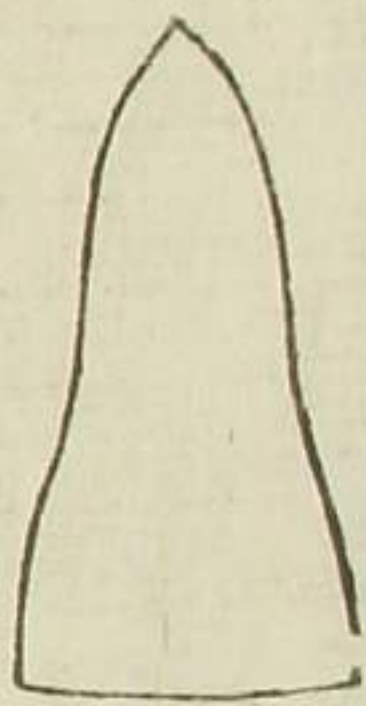
ー也まもくろあぼーぬくざやー也太平記卷十三藤房遁

世の条ま看督長走下部調度懸舎人等細急ぼーいあ

る由ええくろあぼー後三年合戦の給ま細急ぼーいあくろ武

者多くええくろあぼー義家朝臣も細急ぼーあつる御中

薩成記應永成二
 年九月十日
 上皇御幸東山泉涌幸
 布衣隨身一人細
 烏帽子常雜色立
 烏帽子也
 園大曆貞和四年
 十一月廿八日
 條院御細烏帽子
 白襖御狩衣春宮
 大夫引立烏帽子
 園前宰相細烏帽
 子大官宰相細烏
 帽子別當平礼



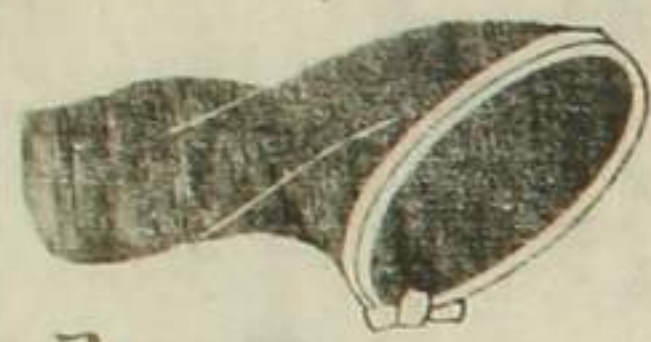
かきあがり



是皆細工ホシ
 着タル形ナリ

右後三年合戦ノ繪ニ見タリ一リナキモアリ又一リヌリモアリ長絹
 ノ直垂ニ細工ホシ着タルモアリ鎧ニ細工ホシ着タルモ有
ハナキマキシタルモアリ

一軍陣の時々々々の下はかぶるゑは〜能く軍中少くもあきまき
 ところ付ものあり是古よりある事あり後三年合戦の繪ニ
 武者の袖がり伏し〜る地巾は引立あがり〜ぬげ落〜る
 形をゑぐ〜るふそ能くあがり〜はちあき付〜るあき
 ち〜ぬげ〜る跡也又あがり〜は必ちあき付〜る事定法
 日あ〜る跡あきを別〜する也あき〜る



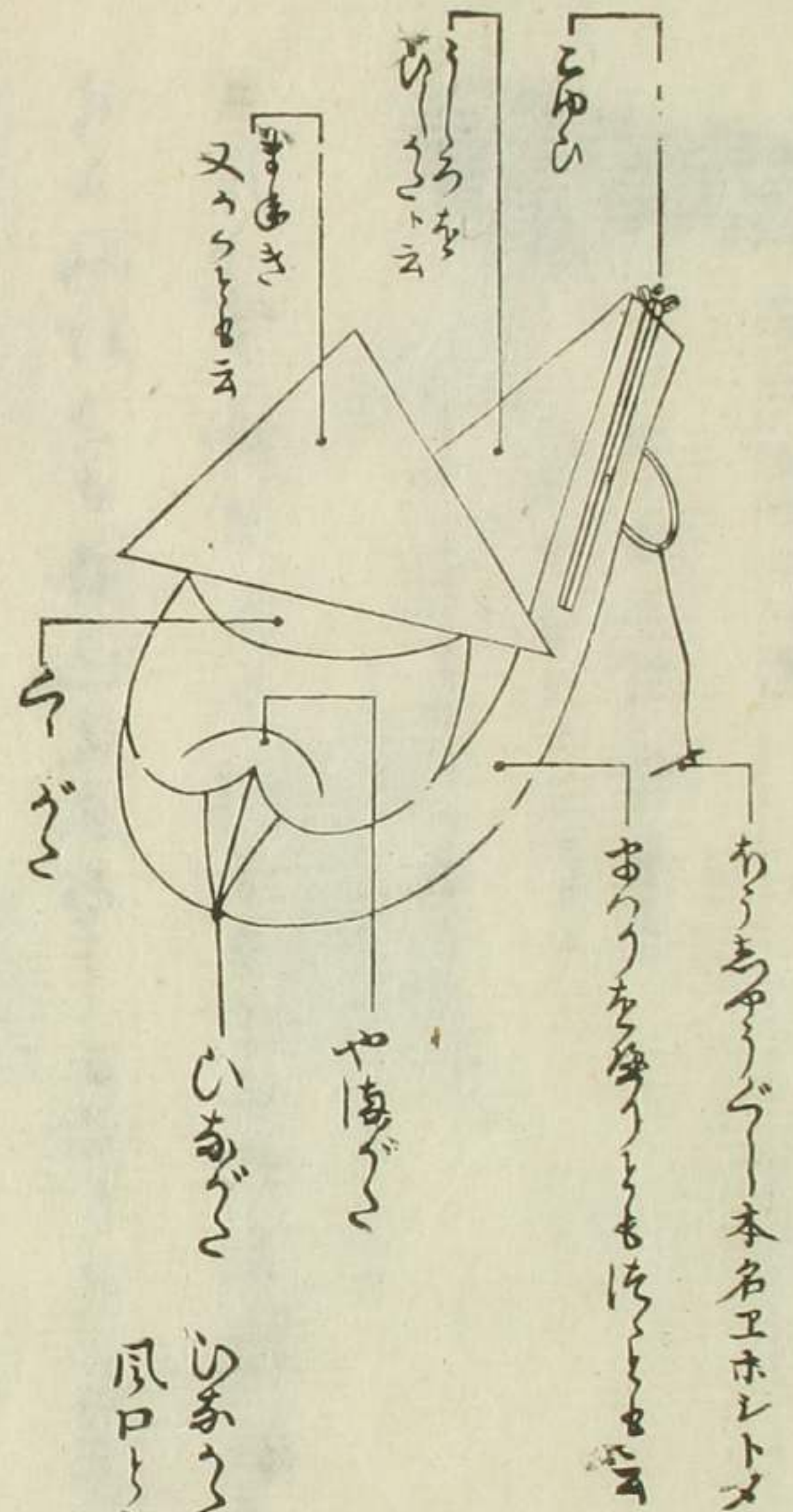
是引立工ホシ也

工ホシノヌゲ落タル馬ナリ

飛彈守惟久カ工ホシ
 後三年合戦ノ繪ニ見タリ

もちあき〜の武具ノ形ニ記ス

一横さびの折る目一の名所



ひまうこのしーろののあを
 風口とも云 五元ちー風折る
 どの風口とも云
 の方のすきとおあり

引入る目
 引入る目
 引入る目

一引入る目一云ハあわし能名大あす屋折る目一
 ても五あわし一りてもわけ緒をうけど一り頭を引入る目
 ともあわし也若此えぼ一り頭を引入る目也えぼ一り

引入る目一云ハあわし能名大あす屋折る目一

引入る目一云ハあわし能名大あす屋折る目一

引入る目一云ハあわし能名大あす屋折る目一

引入る目一云ハあわし能名大あす屋折る目一

引入る目一云ハあわし能名大あす屋折る目一

引入る目一云ハあわし能名大あす屋折る目一

引入る目一云ハあわし能名大あす屋折る目一

引入る目一云ハあわし能名大あす屋折る目一

引入る目一云ハあわし能名大あす屋折る目一

引入る目一云ハあわし能名大あす屋折る目一

好くろの表布一をひきこぎをちいさきごうのつらり
 まうくろの杖ますがりてあむむる。按て夕に綾精好る。作
 あし打あ肩一といふ物の袋は急布一といふ物の熟あ。

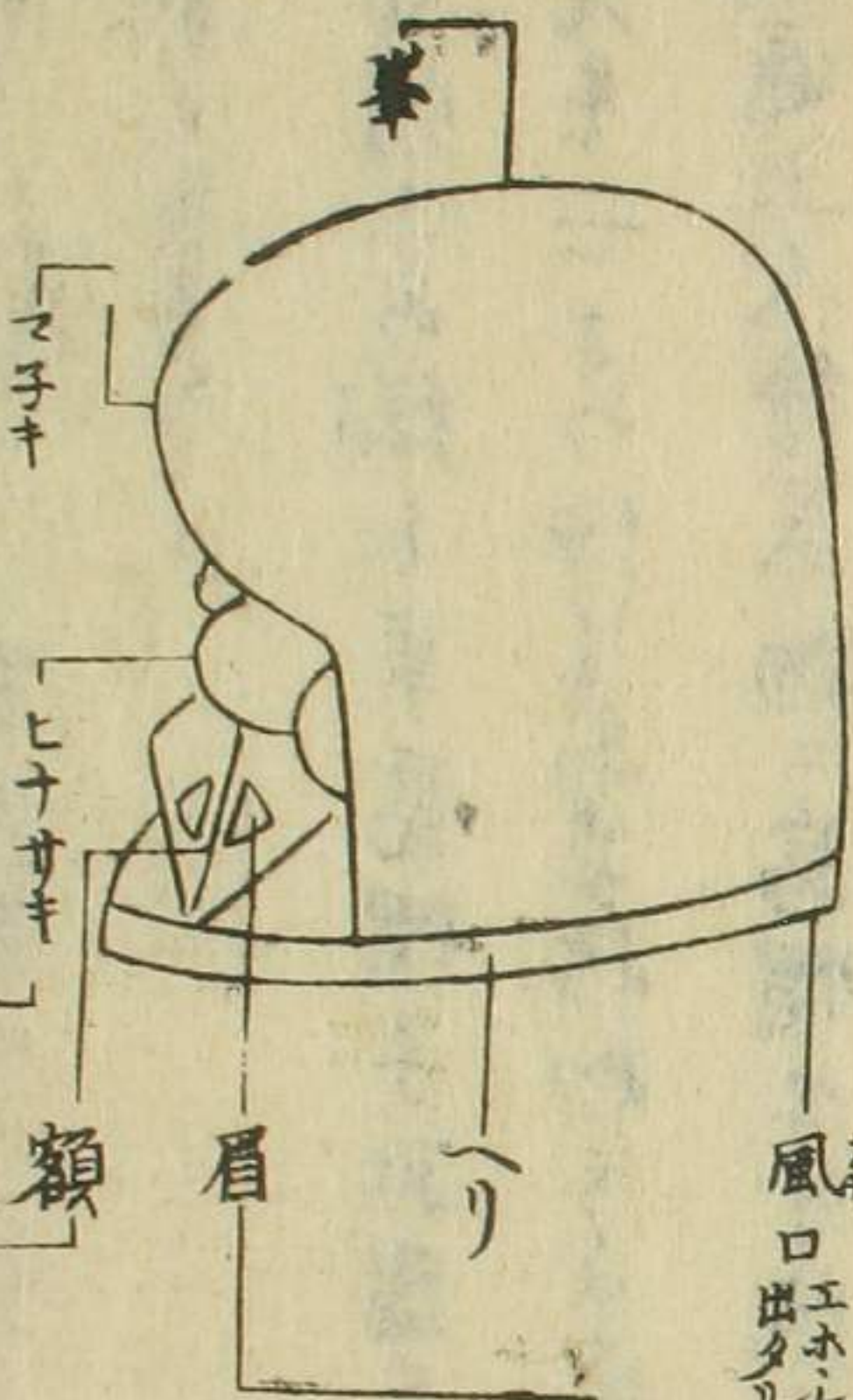
長あ肩一といふ物古代ありし也。せよ五あ肩一の長きを
 いふ故清以能言が枕草子くまああづいといふ物の部云み
 そうはあのもてくろあまあが急布一といふすすぐあくま
 一といふいひ出る物よつきさうりてそよあといふせ
 折いしといふくろ一。云 貞丈云あまき物は五あ肩一のあきをきくろああり
 一といふくろあありきくろあ五あ肩一を折す。

一五あ肩一の恰好の横の廣八寸あれは、縦の長八寸也。大いそ
 唯、知く、縦の長八寸は、過さき人びたりああ、ん、長あ肩一
 一といふき飲

一五あ肩一の名
風折も即、但折をきくろあをひきこぎと云、左折ハ
 右より折る、右折ハ左より折るをいふなり。

風口 出タル所ヲ云下ニスキマアリ
 エホレノレリ頭ヨリアマリテウレド
 カリタ人ノカヒナナリ

左一方ハカリアルハ左眉也又左上リハ
 云右一方ハカリアルハ右アガリト右眉
 云は左ノ如ク両ニアルヲモロモロ云セド
 アガリ氏云ハモロ眉ト云ハ両方ハ
 當時ハ名ノミニテ分レズ



エホレノ懸懸高クヒキク
 アル懸ヲサビト云
 サビハ木形ニテ折出スナリ

雑記三

女アタリノ懸名ナリ

式マハリノクボミタル所ヲ折クボト云

貞丈雜記卷之五

